



始





ノエト-6

96-53/1

新版序

此新版は舊版の幾多の誤謬を訂正し、殆んど  
 各頁に渡りて原文との参照上不適當不精密な  
 る個所を修正し、又た餘り必要なきの故を以  
 舊版に省略した原著者の序文、跋文、一ヶ所の  
 註等の譯を補足した。故に新譯は舊譯の面目を  
 殆んど一新し、より完全なる譯になつたつもり  
 である。附録は舊版の卷頭に掲げた其の目次を  
 其部分の初に移した。及び少許の文字的修

正  
 13. 1. 21  
 内交



正の外別に何等の變更を加へなかつか。

ニ  
初め此書を公にしてより既に十有五年、時代は此種の書を一層渴望するやうになつたやうである。フエヒネルの哲學書は近來その本國に於て、また恐らくは廣く世界に於て、以前より一層多く讀まるゝやうになつたことは、此等哲學書の何れもが近來版を多く重ねたことによりてトすることが出來、また時代精神の要求に適することを證するものである。此小冊子の新版

三  
が幾分か我國現今の人々の渴望を醫し、又た一般に著者の哲學に對する興味を我が思想界に喚起することを得ば、予の幸とする所である。

大正十二年十一月

譯述者誌



## 舊版の序より

四

今日は科學の時代である、科學萬能ともいふべき時代である。人民皆な科學の知識應用を以て自然界を支配し、地球が藏せる富を披き、地球が蓄へたる力を出し、火を使ひ水を制し風を御し、地を縮め時を省き、以て人類の勢力を増し幸福を進め、富強を計つて居る。國民の興亡、國家の隆替、野蠻文明の差實に科學の知識之が應用如何に關するといつても差支ない。

然れども科學の支配、物質的文明の裏面には大なる缺陷がある。即ち精神的のそれであつて、大なる不満足である、自己内の甚だしき不調和である、感情意志の矛盾である、精神の疑惑

である。人々或物を欲するけれども之に接することが出来ぬ、或物を求むるけれども之を得ることが出来ぬ。是に於てか人々皆な其適從する所を知らぬといふ有様である。かゝる有様は今日の所謂文明國に一般であつて、歐米のみならず、實に我國の現狀である。

吾人は科學の教ふる所、科學の與ふる結果を棄つることは出来ぬ。また科學の知識を有し、科學心に滿てる近代人は、之と充分の調和一致を缺ける舊來の信仰宗教そのまゝに依ることも出来ない。吾人は是に於て一の指導者を欲する。然し此指導者は、事實經驗を重んじ、近代の科學を貴びて之に精通し、傳説に依らず、嗜好に驅られず、只だ眞是れ求めて顧みざる獨立

五



自由の精神を有して居る者でなければならぬ。同時に此人は優しき性温かき情を有し、敬虔の心を備へ、慈愛に富み、小兒の如く純粹で無邪氣で、詩人的で、宗教心に充滿する者でなければならぬ。同時にまた、宇宙の謎を善や美の理想が損せぬやうに解かんとする人心固有の欲求に對して、深き理解力を有する哲學者でなければならぬ。吾人は此の如き人の指導を欲し、此の如き人の信仰思想を知り、以て吾人が不満足を治せんと欲して居る。吾人は此の如き人を求めて之をフエヒネルに得た。而して「死後の生活」は、此の如き人の思想信仰を載せたる著述である。

フエヒネルは卓越なる自然科学者であつた、事實経験を重ん

ずる學者であつた。彼は同時に宗教心に満ちたる、詩人的性情を有する哲學者であつた。「死後の生活」は諸科學の事實を基とし、歸納比論の兩法を用ひ、詩的想像を以て之を補ひ、宗教的情緒を帯びたる、未來生活の描寫であつて、正に科學と詩と宗教との靈妙なる融和である。該著はフエヒネルが最初の哲學的努力であつたけれども、彼が哲學の重要な思想であり、寧ろ彼が哲學の結果ともいふべきものである。而して事實経験に戻らず、科學の教と矛盾せぬといふのが、フエヒネルが思想哲學の特色であつて、亦たフエヒネル自身が誇とする所であつた。

「死後の生活」の思想を充分に了解し、公平に評價せんとするには、フエヒネルが全哲學の系統、其根本の思想を知るが必要で



ある、又たフエネルが生活を知るも必要である。彼が哲學は彼が生活と密接な關係があるからである。附録のフエネルが生活及び哲學の叙述は、此必要を充さんが爲めに編述したものである。予は讀者が之を諒して附録の研究も等閑にせざらんことを希望する。

「死後の生活」目次の各章の標題は譯者が假に作つた所であつて、原著に無いのである。該著に於ては各章の内容は錯雜であつて、容易に簡單なる標題を以て之を示すことは出来ない。故に極めて不完全であり、恐くは蛇足であるかも知れぬけれども、多少讀者に便ならんかと思つて之を添ふることゝした。

x  
x  
x  
x

友人長原止水氏は予が爲めに装幀の意匠を工夫せられた。原作の内容の美にまた外觀の美を添ふることを得たるは、止水氏の賜物であつて、予の深く謝する所である。

明治四十三年八月

譯者誌



### 原著者第二版の序文

一〇

此小冊子の第一版は千八百三十六年ミルゼスなる假名にて、今や既に久しく亡き人である(千八百五十年死)書籍商であり且つ作曲家であつた予が朋友グリムマアの發行にて世に公にせられた。此第一刊行は、此小冊子自身が其の一部である著者の生活の第一刊行の如く、第二刊行の見込を抱きつゝ、靜に其路を進來つた。生活の此刊行の年が進むに連れて、書籍の此第一刊行は未だ全然盡きはせぬけれども、遂に終局に垂んとして居る。

予は予の本名にて予の親しき他の發行者にて刊行せる此

第二版を既に故人である予が朋友グリムマアの予が切愛する二女に捧呈する。實に此二人の女には、故人を識れる吾々が愛でたる彼の有らゆる長所が遺傳して居るのである。此捧呈は、此小冊子にて述べられてある見解の意味にて、故人自身が最も好んでゐた方法にて、此本を彼に返すことになること信ずる。彼は此本に對して彼が以前有つて居た物質的權利發行のこ  
とたるべ譯者しに加ふるに、永續的である精神的權利を有つて居るのである。何故なれば、此本の成つたのは、吾等共同の朋友なるビルロートが只だ苟且かまに語り、只だ苟且に守つた思想、然し此著者には確信になつた思想に就いて故人と相話した縁からであるからである。一の實があつて、一の樹が其から生長したので



ある。故人は之が爲めに土地を耕すに助力したのであつた。

茲に希望の一言を述べたい。そはあのやうに麗はしい然しあのやうに忘れられたる故人の歌に、此にこの半ば忘れられたる小冊子にあらんとする如く、近く復活が起らん事である。

實に彼の歌は、吾等兩人が日々一緒になつた時節に、此小冊子と相並んで出来上つたものである。それで彼の歌は之を想出せば猶ほ今ま殆んど旋律の如く此本に和し、此本の中に響入るのである。彼の歌は單純なる魅力のものであるけれども、未來の音樂の未來の後までも其の未來を有つであらう。何故なれば音高きものは美しきものを音壓する。けれども後者は前者よりも永續きがし、而して音高く始まつたものは確に音

高く終ることは出来ないからである。(2)然し美しきものに有効であることは、眞のものにも有効であるといふ意見でなければ、予は、どうして此小冊子の見解の未來を期待することが出来やうか。

(2)未來の音樂以下の一文は蓋しワグナーの音樂に對する著者の諷刺であらう。實にワグナーには「未來の藝術品」といふ著述までもあつて、彼は新音樂の主唱者である。上文の「未來の音樂」といふのは此種の音樂を指すものであらう。靜かな謙遜なやさしきフエヒネルはワグナーのやうな所謂「音高き」壯大な音樂を好まず、また其の未來の永續を信ぜなかつたであらう。——譯者

予が以前の假名を只今實名に更へた理由は明白である。此小著述は其が最初世に現はれた際には、著者の自餘の著述の主



要なる性質から離れて居た。其後予が實名にて公にした幾多の著述は、其内容に於て多少此小著述に連絡し、而して此著述は共同の起原を指示する爲め其等の著述に連絡の出来るものであるからして、此は其等著述の一連続の最初のものとなつた。最後に其等の著述は、此著述と相俟つて一の關聯ある世界觀を成し、而して此世界觀は半ば此著述の内容から維持せられ、半ば其自身該内容に貢献するといふ見地から見、其等著述の目錄内容が自から明かになる。此小冊子に只だ簡單に述べられたる見解の詳細は予が「ツェンドアウエスタ」の第三部に載せられてある。

此版は前版に比して、只だ主要でない點に於てのみ變更せ

られ、幾多の點に於て擴張せられた。

(千八百六十六年)

### 第三版の序文

只た一言して置けば充分である。即ち新版は五十七頁に於ける註の附加と、前版の終に於ける、天の視力の原理に關する容易に爭論の起り得べき附加文の省略の外、只だ二三句の肝要ならぬ變更に於てのみ、前版から異つて居る。

第四版は著者の死後初めての版であつて、第三版の言語的



一六  
に忠實なる印刷である。只だ本の大きさが前と異つただけであ  
る。

千九百年三月

發行者

## 死後の生活目次

原著者の序	一〇頁
第一章 總說生活の三階段	一九頁
第二章 來世の體の形成	二四頁
第三章 來世の靈の各人に及ぼす影響	四一頁
第四章 來世の靈の人類に及ぼす勢力	五三頁
第五章 死者との交通	六〇頁
第六章 死後他の靈との關係	七一頁
第七章 現世と來世との状態比較	七九頁
第八章 來世の卓越自由	九二頁

目次

一七



一八

第九章 來世の體の擴張、地球は活物……………一〇一頁

第十章 幽明兩界の門戶、幽靈……………一二一頁

第十一章 人と神……………一三三頁

第十二章 結論……………一三頁

原著者の跋……………一四一頁

# 死後の生活



## 第一章

人が地上に生活するは、一度でない、三度である。第一の生活階段は、絶えざる睡眠である。第二の生活階段は、睡眠と覺醒との交互の生活である。第三は永久の覺醒である。

第一階段に於ては、人は孤獨に闇黒内に生活する。第二階段に於ては、社交的である、而して他人より分離し、他人に隣接し、



他人の間に介在し、事物の表面を照す光線の中に生活する。第三階段に於ては、其生活、他の靈の生活と纏結し、最高の靈の内に於て、高等の生活となり、有限事物の真相を透見することが出来る。

第一階段に於ては、體は胚種より發達し、第二階段に必要な機關を構成する。第二階段に於ては、靈が其の胚種より發達し、第三階段に必要な機關を作成する。第三階段に於ては、神的胚種が發達する。此神的胚種は、各人の靈内に潜在し、既に吾人の世に於ても、豫感、信仰、感情、本能等に依りて、人界を超越し、現世の吾人には陰暗であるが、第三世の靈には白日の如く明なる來世を、吾人に指示するものである。

第一の世より第二の世へ移ることを誕生といふ、第二の世より第三の世へ移ることを死といふ。

第二の世より第三の世に移る道は、第一の世より第二の世に達する道より暗黒なるものでない。後者は外的に世界を見るに至る道である。前者は世界を内的に見る道である。

第一の世に於ては、嬰兒は第二の世の有らゆる光彩音樂に對して、盲であり聾であり、暖かき母體よりの誕生は、難澁であり苦痛である。又た其の誕生の時には、未だ外的の新存在に覺醒せざる以前に、從來の存在の破壊を以て死であると感ずる瞬間がある。丁度此と同様に、吾人の全意識が、猶ほ狭き肉體に束縛せられてある吾人が、現今の存在に於ては、吾人は、第三の



世の光彩音楽其の生活の燦爛自由を毫も知らない、而して彼岸に吾人を導く狭き闇き通路を以て、動もすれば出口のない行きつまり路とする。然しながら、死は只だ一層自由なる存在に至る第三の誕生に過ぎない。此自由なる存在に於ては、靈は其の窮屈なる皮殻を破りて、之を頽敗に委ねしむること、丁度小供が其の第一の誕生に於て、其の胞わだかまを破棄するが如くである。

靈が窮屈な形體を棄てた後は、吾人が現在の官能を以てしては、只だ外的に、言はず、只だ遠方より近づくを得る事物が、内的に透徹せられ、完全に感知せらるゝであらう。靈はその時、山野を跋渉せない、春光の胎蕩怡々たるに圍繞せられない、然し

萬物只だ外的であつて全く之を領すること能はざるを懊惱することはない。靈は山や野を透徹し、山の堅固かたさも、野の生長の樂さも感知するであらう。靈は又た言葉や身振で、思想を他人の心に起すの莫迦骨折をするの必要がない。靈と靈とは形體によりて分離せられないで、却て之に依りて結合せられ、相互間の直接の交渉作用に於て、思想を起すの樂が生ずるのであらう。

靈は、現世に残し置きたる親愛する者に、外的に現はれずして、彼等の靈魂の一部となりて、その靈魂の深奥の精神に住し、其の内に在り且つ其を通じて思考行爲するであらう。



## 第二章

嬰兒は母の胎内に在つては、只だ體靈 (Körpergeist) 即ち其の形體を形成する衝動を有するのみである。嬰兒が發育しつゝ長生する四肢機關の創造發達は、其の行爲である。嬰兒は、此等の肢體は、自己の所有であるとの感を未だ有たない。嬰兒は之を使用せず、又た之を使用することが出來ぬからである。美しき目、美しき口は、嬰兒には只だ美しき對象物であるのみで

あつて、他日之が自己の有益なる部分になるのであらうことを知らずして、之を創造しつゝあるのである。此等の諸機關は、嬰兒が未だ毫も知らざる來世の爲めに作らるゝのである。嬰兒は只だ母體の有機組織に明白に基ける、嬰兒自身には不明である衝動に依りて、此等の諸機關を出だすのである。

生理學者には、より適切に次の如く言ふことが出来る。嬰兒の創造原理は、(Das schaffende Prinzip) 其出産以前には、其誕生後、生存を繼續する部分、先づ最初は附屬的のもの、即ち創造せられたものに在らずして、誕生後、後に殘され、廢棄に委ねらるゝ嬰兒の其部分に在ること、猶ほ人の體が其死後に於けるが如くである。故に人は、嬰兒の活動よりして、其繼續として發生するのである。



然れども嬰兒は第二の生活階段に適する如く成熟し、彼が是まで創造し來た機關を棄擲するや否や、突然自分自身が是までの創造の凡ての機關が獨立した活潑なる統一であることを見るのである。此眼、此耳、此口、今や彼自身のものである。而して最初不明な生得の衝動を以て此等を作成せしも、今は其の重要な使用を知り、光線、色彩、音響、香氣、味、感情等の世界が之が爲めに作られたる機關に依りて、今こそ初めて彼の前に現出する。此等の機關が完全であればあるほど、一層好く該世界が彼の前に現出する。

第一の世が第二の世に於ける關係は、再び第二の世が第三の世に於ける關係に高潮せられて再び現はれるであらう。現

世に於ける吾人の總ての行爲意志は、來世に於て、吾人の自己として且つ使用すべき一有機體を創造せんが爲めである。人の一生中、彼から出でたる、而して人間界及び自然界を貫ける有らゆる精神的作用有らゆる努力の結果、此等は皆既に秘密なる不可見の紐にて、互に結束せられてある。此等は人が其生涯中に出した靈的肢體であつて、一の靈的體絶えず廣がれる勢力活動より成る一有機體に結合せられてある。而して此等勢力活動は、猶ほ未だ彼の意識外に在り、従つてたとひ其等が分離することが出来ぬやうに、現今の彼の存在にひどく纏結して居るけれども、只だ現世を出でた間際に於てのみ、之を自己の所有と認むるのである。死の瞬間、人が其の創造する力が現



世に於て結合せられてある機關より別るゝ死の瞬間に於て、從來の活動の結果として、觀念勢力、効果の世界に存續し、作用し續ける一切を忽然意識する。而して此等の一切は有機的に一源泉より流出したものの如くであつて、實際に猶ほ其自身に其の有機的統一を有して居る。然し此統一は今この死際に當つて活躍となり自己意識を得、獨立活動し其の個人的たる自己の權力を以て、自己の使命に従ひ、人間界及び自然界に云爲するのである。

誰人にも其の生存中、人間界及び自然界に行渡れる觀念の創造形成、或は保存に貢献したるだけは、是れ彼が不朽の部分であつて、たとひ第二階段に於ける活動力の結合されてあ

る身體は既に久しく朽ち果てゝあつても、是れだけは猶ほ第三階段に繼續活動するのであらう。死したる億兆の創造し、行動し、思考したるものは、身と共に亡びない、又た次代の億兆が創造し、行動し、思考したるものゝ爲めに破壊さるゝこともない、却て次代の億兆の中に繼續し、彼等の中に自ら活潑に一層發展し、彼等自身が知らざる大目的に向て彼等を驅るのである。なるほど生活の此理想的無形繼續は吾人に單に抽象と思はれ、死人の靈が生者の中に繼續活動するといふことは、只だ空虚の思惟された事物の如くに思はれる。然し是れ他<sup>ほか</sup>ではない、吾人は、自然に充滿し、自然に透徹せる第三階段の靈の眞成の存在を覺知する官能を有せぬからである。吾人は、此等の靈



三〇  
の存在が、吾人が存在と結合する點を知るのみである。此結合點は、則ち靈が吾人の中に分入り生長した部分であり、靈が吾人の中に植附けた觀念の形式にて、吾人に現れる部分である。水中に投込まれたる石が起す波の圓は、水面上に現はれて居る有らゆる石に觸れて、その周圍に新に波の圓を起す。けれども、最初の波圓は、依然として其自身に連續する一の圓であり、凡ての他の圓を起し、且つ之を其圓周内に包含する圓である。然れども、水面の石は、只だ大圓の破片を知るばかりである。吾人も丁度此の如き無知の石のやうな者である。只だ吾人は頑たる石とは異り、吾人自身に、皆な既に生時に吾人の周圍に影響の連續せる圓を起し、その圓は、他の圓の周圍のみならず、

又た他の圓の中にも侵入して廣がるのである。

實に人は皆な既に其の生時に、言語、文章、行爲、事業等を以て影響を及ぼし、他人の精神に入り、其の中に生長するのである。既にゲーテの生時には、同時代の幾百萬人が、自己の内にゲーテが靈の閃光を有して居た。而してこの閃光よりして新に火が燃わ出した。既に奈破倫の生時には、彼が靈の力は殆んど全世界に貫入した。兩人は死んでも、彼等が世界に出した生活の此等の枝は共に亡びない。只だ現世の新らしき枝の萌芽力が亡びたゞけである。此等の世界に出した枝は、元來一人格より出で、其の總體は亦た一人格を形成して、生長し、發達し、以前其の最初の發芽の時の如く、今は同じく内住的なる而して儘に



吾人の解する能はざる自己意識を具へてゐる。グロテヤ、シルレルや、ナポレオン、ルター等は、今も猶ほ吾人の間に又た吾人の内に、自己意識ある、其の死際より既に一層發達した個人として生存し、吾人が内に在りて思考し、行動し、觀念を起し、進んで猶ほ發展しつゝある。何れも今は窮屈なる體内に閉ぢこめられずして、彼等が生時に教養し、怡樂を與へ、制御を加へし世界に浸潤し、而して彼等自身に於ては、吾人が猶ほ彼等から感ずる感化以外に遠に達して居る。

猶ほ後世に引續き生活し活動する勢力ある靈の最大の例は、吾人之を基督に於て見る。基督は其の信者に於て生活すとは、空言でない。純粹の基督教信者は何れも、單に譬喩的の意味

でなくして、實際に活きたまゝの基督を自己内に有して居る。基督の精神に従つて、思考し、行動する人は、誰人も基督を分有するのである。何故なれば正に唯だ基督の靈こそは、此の如き人の内にて、此思考行動を爲すのであるからである。基督は、彼の教會の全肢體を通し廣がつて居る。凡ては、彼の靈に依りて互に相關聯して居る。丁度林檎が其の樹に於けるが如く、葡萄蔓が其の幹に於けるが如くである。

「一體は一にして多くの肢あり。一體の凡の肢は多けれども一體なり。キリストも亦たかくの如し。」新約全書哥林多前書第十二章第十二節

只だ最大の靈のみならず、凡ての健全なる人は、無限の精神的創造、薰化、及び動因の統一を自己内に包含する自己創造の



有機體を以て、次の世に目が醒むるのである。此有機體は、その人の靈自身が生存中に廣く且つ強く自分の周圍に延びることの如何に従ひ、或はより大なる、或はより小なる範圍を充滿し、又た或はより多き、或はより少なき發展力を有するのである。されば此世に於て浮世の歡樂に執着し、只だ彼の物質を動かし、之を養ひ、之を樂ましむることのみに孜々として、其の靈を用ゐるものは、次世には、只だ實に彼の無價値つゝまらぬものゝみが残る留るであらう。それで非常な富者も、其の力を節約せんが爲め、のみにその金を使はば、後ちには極貧者になるであらう。之に反して、極貧者も、誠實の暮を得んが爲めに、その力を使はば、後ちには大富豪となるであらう。蓋し誰人も、此世に出だし

たものは、次世には之を得るであらう。而して金錢は彼世に於ては、其が作つた價値あるものだけの價値を有つであらう。

吾人が現世の精神生活の謎、現世には半ば吾人に何の益もなき眞理の探究の欲望、只だ後世の爲めになるべき事業を爲さんとの、凡て正當な人の努力、現世には實際何等の不利益も生ぜざる悪行の爲めに究め難い心配を吾人に植付ける良心後悔の念、此等は、吾人が最少最微の行爲の結果さへも吾人が自己の分となれる未來世に於ては、凡て如上のものが吾人に齎らすであらう結果についての豫感より生ずるものである。人は皆な自己の未來の存在の條件を自ら作成するのである。ことは造化の偉大なる正義である。人は外的賞罰に依り其



の行爲に報いられない。基督教猶太教及び異教にて言ふところの普通の意義にての、死後靈魂の行くてふ天國もなければ地獄もない。靈魂は前方に一跳躍もせなければ、後方に一退歩もせない。又た静止もしない。世間へ爆發し散することもなければ溶解し去ることもない。靈は死てふ大なる厄年の病を経過した後も、一層高等の存在となり、又た一層高尚の存在となり、らんが爲めに、猶ほ引きつゞき靜に地上に於て發展するのである。その發展の方法は、段一段と基礎の上に築き上ぐる宇宙の不變なる次序の法則に遵ふのである。故に人はその行爲の善なり惡なり、高尚なり卑俗なり、勤勉なり懶惰なるに従ひ、次世には或は健全な、或は病弱な、或は美なる、或は醜なる、或は強

き、或は弱き有機體を、己が所有として見出すであらう。現世に於ける彼の自由たる行爲は、次世に於ける他の靈に對する彼の位置、彼の運命、猶ほその後の發達に對する傾向能力等を規定するであらう。

されば、諸子は、元氣で誠實であれ。蓋し今ま此處にて徐行するものは、後ち彼處では跛行するであらう。今まその目を開かざるものは、後ちには薄弱なる視力を有するであらう。此世にて詐偽邪惡を行ふ者は、後ち眞實善良の靈の合唱との己れの不調和を苦痛と感ずるであらう。この苦痛は、彼世に於ても、彼をして惡を改めしめ、此世にて爲せる罪惡を治するの動機となり、又た彼がその最徹最後の惡行をも掃ひ且つ償ふに至る



までは彼に休息寧安を與へぬであらう。又た他の靈は、既に久しく神に入りて休息し、神の思想の分有者となり居るに、自分は猶ほ地上に憂鬱と人生の無常との裏に流轉し、彼が靈魂の病は、謬見迷信の觀念を以て人を惱まし、惡業愚行に人を誘導するであらう。又た彼自身は、第三の世に於て完全の域に至らんとする路上に、遅々として後れ残ると同時に、彼が引きつゞいて其の中に住する他人をも、之が第二の世より第三の世へ行く路上に引止めて、進ましめぬであらう。

虚偽、邪惡、卑俗が如何に長く繼續し、其の存在の爲め、眞實、善美、正義と如何に鬭争しても、遂には此後者の絶えず増長する勢力の爲めに征服せられ、又た増加する勢力を以て反動し來

れる彼其自分の行爲の結果に依りて、自ら破滅に陥り、遂には有らゆる虚偽、有らゆる邪惡、有らゆる汚穢が、微塵だも人の靈魂内に残り留らざるに至るであらう。只だ彼の眞善美なるものだけが、吾人人間の永久不朽の部分である。只だ之が芥種かいらしのたぐは、ご人に在つても——是の毫もない人はなからん——第三の世に於ける只だ惡をのみ苦しむる淨罪火に依りて、該善種子は、遂には其の糊や糠から淨められて残り、而してたとひ遅くはあつても猶ほ立派なる木に生長することが出来るであらう。

爾等此世に於て、その靈が悲哀と懊惱とに依りて鍛鍊はれたる者は喜ぶべし。爾等が此世に於てその進歩の妨礙に對し



四〇  
て勇ましく奮闘しその際に得たる鍛錬は、爾等の利益となり、  
而して一層丈夫に新しき存在に生れて、爾等の運命が此世に  
ては逸せしめたものを、一層迅速に、一層愉快に恢復するであ  
らう。

### 第三章

人は一の目的の爲めに多くの手段を用ゐる。神には一の手  
段が多くの目的に役立つ。

植物は以爲らく、吾れ只だ我が爲めに此に在り、生長せんが  
爲め、風に動揺かんが爲め、光と空気を吸入せんが爲め、自分の  
飾に芳香と彩色とを作らんが爲め、甲蟲や蜂と遊ばんが爲め  
に此に在りと。植物固よりそれ自身の爲めに其處に存在する。



然れども同時に、植物は只だ地球の氣孔であり、光線、空氣及び水が此に會合し作用して相纏結するのであつて、全地球の生活に緊要缺くべからざるものである。植物は地球の爲めに蒸發し、呼吸し、地球へ綠衣を織つてやり、人類及び動物へ食物、衣服、温暖の材料を供給する爲めに其處に在るのである。

人間は以爲らく、吾れ只だ我が爲めに此處に在り、樂まんが爲め、自分の肉體的、精神的生長の爲めに活動創造せんが爲めに此處に在りと。人固より彼自身の爲めに其處に在るのである。然れども同時に、彼の身體及び精神は只だより高等なる他の靈の住家であつて、此等の靈は、此住家の内に入り、結合し、發展し、相互に諸種の作用を起すのである。而して此作用は、同時

に人の感情思想であつて、第三の世の爲めに一層高き意義を有するのである。

人間の靈は、その自己の所有たると同時に、此等の高等なる靈の所有であつて、何れのものに屬するとも區別することは出来ない。故に人の靈内の出來事は常に同時に兩方に屬するのであるが、その屬する方法は異なるのである。

丁度此圖に於て——此圖は摸寫でなくして只だ象標或は比喩のつもりである——中央の諸種の色現圖にては黑色の六の射光にて成る星形は自己内に內的





統一を有する獨立のものと見ることが出来る。而して其の射光は皆な其中心に從屬し、之に依りて統一的に結合されて居る。然れども他方には此等の射光は皆な夫れ／＼、亦た自分で内的統一を有する六種の單色の圓の連結より融合し成つた如く思はれ、而して各射光は自己に屬すると同時に、此射光の依りて以て生ずる交錯する圓にも屬するのである。人間の靈に於ても、丁度此の如くである。

人は往々その思想の何處より來れるかを知らぬことがある。只だ偶然或るものを思ひつくことがある。自己のどうしても説明することの出來ない憧憬、懸念、或は快感等が彼を襲うて到ることがある。又た特別の理由を意識せずして、或る力が

行動するやうに彼を促し、或は或る聲が行動を中止せんことを彼に警告することがある。是等は他靈の干涉であつて、彼自身の中點より異なりたる中點より、此他靈が彼の内に入りて思惟し、彼の内に入りて行動するのである。他靈の吾人内に於ける作用活動は、睡遊精神病等の變態の場合に於て一層明瞭である。即ち是は他靈と吾人との元來相互的である從屬關係は、他靈の爲めに有利に決定し、吾人は只だ受動的となつて、彼等より吾人に流出するものを受くるのみであり、吾等より彼等への反動がない場合である。

然れども人間の靈は、これが覺醒してあり健全である以上は、縱令他靈が之に侵入生長し、或は之が此等他靈と纏結して



生長するやうに見ねても、他靈から勝手にせらるゝ玩弄物若しくはその産物でない。健全なる人間の精神は、丁度此等の諸靈の結合者、精神的引力の充滿する不可見なる、根本生命の力強き中心點である。此中心點に於て、皆のものが輻輳會合し、此に凡てが相交叉し、相交通して思想を生ずるのである。此中心點は、もと諸靈の交叉に依りて初て生じたものでなくして、人間の本來の所有として、其の生るゝ際から彼に具有してあるものである。自由意志、自己決定、自己意識、理性、凡ての精神的能力の基礎等、皆な此に包含せられてあるのである。然しながら、凡て此等は人の生るゝ際には、未だ萌芽せぬ胚種に於ける如くに、此に潜伏して在つて、先づ活潑々地の個人的實在に充滿

せる有機體に發達せんことを俟ちつゝあるのである。人の此世に生るゝや、他の靈は直に之を覺りて、四方より推し寄せ、彼等自身の勢力を強大ならしめんが爲め、彼の靈の力をして、彼等自身の力たらしめんことを努むる。然れども、他靈が之を遂ぐると同時に、此新勢力は人靈の所有となり、人靈に鑄入せられ、而して其の發達に貢獻するのである。

人心に入りて生長したる客靈は、異なりたる方法ではあるけれども、正に人靈が他靈に從屬する如くに、人間の意志の感化に從ふべきものである。他靈が人の心を決定し、之に作用することが出来るやうに、人はまたその自己の靈的存在の中心よりして、自己内に結合して居る他靈内に新に事物を産み入



れることが出来る。然れども圓滿に發達したる靈的生活に於ては、何れの意志も、他の意志に對して、優勢を有たない。凡て客靈は、只だその自己の一小部分を個人と共有するから、個人の意志は、殘餘の全部分を人間以外に有する客靈に對しては、單に刺戟的影響しか與ふことは出来ない。又た凡て人靈は自己内に頗る雜多な客靈を共同的に宿すからして、其中の一客靈の意志は、全人靈には、また單に刺戟的影響しか與ふることが出来ない。但し、若し人にして、自ら好んで、全く一身を擧げて他靈に委ねば、他靈を制するの力を失ふのであらう。

凡ての靈差別なく、同一の人靈内に結合調和することは出来ない。故に人靈を占領せんが爲め、善靈惡靈、眞靈僞靈、互に相

争ひ、その争に勝つものが人靈を占領する。吾人に往々起る內的闘争は、吾人の意志理性、一言せば吾人の内界を、自己の内にせんとする客靈の闘争に外ならぬのである。吾人は自己内に宿れる諸靈の一致を、自己の平和、清朗、調和、安寧として感じ、彼等の闘争を、内心の不安、疑惑、動搖、混亂、不和として感ずる。然れども、吾人は此闘争に於て、より強き靈に供せられたる、奮闘なき、或は遲鈍なる犠牲ではない。吾人は、自己の中心に於て混々として盡きざるその固有の活潑なる力を以て、自分の方に引寄せんとする闘争者の間に立ち、自己の欲する方の者の爲めに戦ひ、時には強者に對して弱者に加勢し、以て之に勝利を得せしむることも出来る。故に人自身は、彼にして、その力の本來



の自由を保持し、之を使用するを倦まざる以上は、靈の戦闘の真中に在りて、何の危険もなく、晏然として之に居ることが出来る。然し人が屢々惡靈の捕ふる所となるは、その内部よりの力の發展が、倦怠に妨げらるゝが故である。惡となるには、只だ懶惰倦怠にて充分なることが、屢々ある。

人既に善なれば善なるほど、一層善になり易く、惡なれば惡なるほど全く惡に歸し易い。その故はかうである。善人は既に自己中に多く善靈を收めて居り、而して此等善靈は、彼と提携して、殘留の惡靈、また新におし寄する惡靈を追掃ひ、且つ彼が内部よりの精力の消費を彼に節約しやるからである。善人は勞なくして善を爲し、彼が諸靈、また彼が爲めに之を爲る。惡人

は先づその内部の力を以て、彼が善行に反對する凡ての惡靈を抑壓し、之を征服せねばならぬ。

類は類を求めて之と親み、強ひられざれば、自分と反對の性質のものより遠ざかる。吾人が内の善靈は、吾人が外の善靈を招き、吾人内の惡靈は、吾人外の惡靈を招く。純粹の靈は、好んで純粹の靈に宿り、吾人外の惡は、吾人内の惡によつて吾人を捕捉する。善靈先づ吾人が靈内に優力なれば、内に潜み殘れる最後の惡魔も自ら直に逃去る。惡魔は善靈の中には居心好からず。故に善人の靈は、其内に相並び住める福祉ある靈に取りては、純清なる天の棲家であるのである。然れども善靈と雖も、優勢なる惡魔に對し苦戦し、到底人靈を得るの見込なき時は、之



を全く悪魔に委ぬるのである。然るときは、人靈は終に地獄となり、地獄に陥りたるもの、苛責に適したる場所となる。蓋し悪人の精神に於ける良心の苦痛、その懊惱不安は、單に此悪人のみでなく、またその中の悪靈が一層の痛切を以て感ずる苦痛であるのである。

### 第四章

高等の靈は、個人に宿るのみならず、その各自が、幾人にも分れて宿るからして、或はある一の信仰に於てとあれ、或はある一の真理に於てとあれ、或はある一の道徳的努力にてであれ、若しくは政治的努力にてであれ、とにかく精神的に、此等の人々を結合するのは、此等高等の靈である。凡て相互に何か精神的共通を有する人々は、一緒に同一の靈の體に屬し、而して此



靈より出で、彼等に入りたる觀念に服従すること、相屬する肢の體に對する如くである。時としては、一觀念が、一緒に全國民内に生きて居ることが屢あり。時には、同一の群の人が、同一の事業に鼓舞せらるゝことが屢々ある。是れ偉大なる勢力の靈が、彼等を襲ひ、流行病の如くに、彼等皆の中に透入したのである。斯様な靈間の結合は、死人の靈が之を爲すのみならず、又た無數の新しく生れた觀念は、現存者よりして現存者に作用を及ぼすのである。然れども、凡て生存者から世界に出行く此等の觀念は、實に彼が未來の精神的有機體の肢であるのである。

二個の類似の靈が、人間界に於て相會逢し、その共同の要素にて、互に相纏結して生長し、同時にその異種の要素に依りて、

互に相決定し豊富ならしめば、此に彼等が最初個々別々に宿つた社會種屬國民等は、また同時に、精神的共同に入り、その精神的財産を以て、相互に富ましむるのである。故に第三階段の靈的生活の人間界に於ける發達は、人類の發達進歩と相提携して離るべからざるものである。社會國家、通商貿易の徐々たる發達、科學藝術の進歩、又た此等人生の諸範圍が、益々發展して大となり、調和せる諸肢を有する全き體に組織せらるゝこと、此等は皆な、人類界に生活活動する無數の靈的個體が集合生長して、一層偉大なる精神的有機體となつた結果に外ならぬのである。

然らば、中心に居て周圍を見ず、周圍に居て中心を見ざるが



如き近眼的個人の混沌たる我利的行爲よりして、上記のやうな廣大なる人生の諸範圍が、千古不易の觀念に従ひどうして發展することが出来るであらうか。是れ即ち、明白に全體を通觀する高等の靈があつて、隅から隅まで、此仕懸を動かすのであり、又此等の靈が皆な共同の神的中心に推寄せ、而して同時に彼等の神的要素を以て之と相融合し、以て彼等が宿り働ける人間をも一緒に高尚なる目的に連れ行くからではなからうか。

互に親善で交ることを喜ぶ諸靈の調和の外に、また性質相反する諸靈の闘争がある。この闘争に於ては、凡てつまらぬ不和に捕へられたるものは遂に磨滅せられ、永遠的のものゝみ

が、その純清を持して殘留するのである。此闘争の痕跡は、人類界にも之を觀ることが出来る。即ち諸種の體系の争、宗派の憎惡、帝王及び國民間の戦争謀反の如きが是れである。

人間の群衆は、盲目的な信仰、盲目的な從順、盲目的な憎惡、盲目的な暴怒を以て、此等の大仕懸の精神的運動に躍込こびこむ。彼等は、自己の靈の眼を以て見ない、自己の靈の耳を以て聽かない。彼等は彼等の知らざる目的の方へ、他靈より驅りたてらるゝのである。彼等は宛然群羊の如く、高等の靈の鞭に驅られ、奴隸状態、死亡、有らゆる恐ろしき難澁の中をも引廻さるゝのである。

勿論又た明瞭なる自覺と精神の獨立とを以て行動指導し



つゝ、此偉大なる運動の渦中に入るものもある。然れども、彼等も豫定の大目的に對する有意的方便に過ぎない。彼等は、固より、その自由なる行動により、運動の方法速度を規定することは出来るけれども、其の行末の目的を如何ともすることは出来ぬ。自分の生活する現在の精神的傾向を察し、その自由なる行為思考を該傾向に嚮けたものゝみが、世界に於て偉業を成したのである。該傾向に反したものは、一樣に偉大であつても、其者は覆滅してしまつた。最良の目的を定め、之に達する最良の道を知る靈(神)は、前者の如き人物を選出して、その活動力の新中心點たらしめたのである。此の如き人物は、盲目的な道具でなくして、自己の刺戟、自己の理智よりして、該靈の正義と、賢

智とに奉仕せんとするのである。善く奉仕を果たすものは、鞭笞を加へらるゝ奴隷でない。現世で神に奉仕せんが爲めに事業を始めた者は、來世に於ては、神の支配に與り、以て現世の此事業を繼續遂行するであらう。



## 第五章

死者の靈と生者の靈とが、幾多の折に相知らずして出逢ふことがあらう。又た幾多の折に、只だ一方からのみ知りて、相逢ふことがあらう。誰人も、よく兩者の全交際を跡ね、之を究むることは出来ぬ。吾人は、只だ簡單にかく言ひたい、即ち、靈の相逢ふと謂ふのは、彼等が互に意識を以て相逢ふの意である。死者の現存と謂ふのは、彼等が意識を以て、其處に在るの謂である。

死者と生者との意識ある逢會の一手段がある。是は、生者が死人を憶ふことである。死者に注意を向くるといふことは、一度生きて居る人に加へた一刺戟が、この刺戟を加へた處へ、その人の注意を誘ふ如くに、吾人に對する死人の注意を呼起すことである。

吾人が故人を憶ふといふことは、實に故人が現世に意識ある生活を有する結果であり、吾人の意識内に現はれ而して彼等に反動したる斯様の結果に過ぎないのである。然れども、來世の生活は、現世の生活の結果として導かれるのである。

生者が生者を思ふ時にも、思はれる人の意識に一刺戟があらう。然し先方に何等の手答を與へないのは、先方の意識が、ま



だ全然窮屈なる肉體の束縛内にあるからである。死して以て此束縛を脱却したる意識は、その自分の居場處を求め、そこに加へられた刺戟に従ひ、加へられた刺戟が、前以て頻繁で、且つ強ければ、それだけ之に従ふこと容易で、且つ強くあるのである。

凡て有形的の一打撃は、打つものも、打たれるものも、兩つながら之を感じる如くに、故人を思うて起れる意識の一打撃は、思ふもの、思はれるものの兩方から感ぜらるゝのである。吾人が先方の意識を覺らないが爲め、只だ此方の意識のみ現存と思ふは、誤れるものである。此誤謬は一般に誤謬や怠慢に伴ふ結果を生ずるのである。

戀人はその戀しき人を奪はれ、夫はその妻を奪はれ、兒はその母を奪はる。彼等その裂き持行かれたる命を、遠き天に求むるも甲斐なし。虚空を視詰め、虚空に手を延すも甲斐なし。彼等の戀慕へるもの、實は彼等より裂き奪はれたるのでない、只だ外的交通の緒が絶ねたばかりである。兩方が由つて以て互に了解した外的官能に依れる間接の交通が、内的官能に依れる内的直接的交通になつただけである。彼等はまた此内的交通により互に相語ることを學ばなかつただけである。

予は嘗て、母がその生きて居る小供を自分の腕に抱いて居りながら、心配して、家や庭を尋ねまわつて居るのを見たことがある。死者を遠方の虚空に求むる者の誤は、之より一層大で



ある。之を自分の側に見出すには、只だ自己の内心を見れば宜いのである。母がその内心に全く兒を有たぬのに、外的に腕に之を抱いてゐたとて、全く之を有つたと謂へるであらうか、外的交通の便利、即ち外的言語、外的瞥見、外的鞠養は、最早や之を有ち、之を與ふることは出来なけれども、内的交通の便利は、今まこそ初て之を有ち、之を與ふることが出来る。只だ内的交通、かやうな交通の便利あることを知りさへすれば宜いのである。此處に居らぬと思へる人と、話すこともなければ、握手することも無い。只だ諸君が、此等のことをよく辨へば、故人と生者との新生活が開始せらるゝであらう。同時に死者も生者もこゝに同じく利益を受くるであらう。

只だ熱心に死者を思へ、さすれば、死者の思想だけでなく、死者自身が、直に其處に在るのである。諸君は、只だ心から彼を招げ、彼は必ず來るに相違ない。彼を止め、彼は止まるに相違ない。只だ一心不亂に彼を思ふのが肝要である。彼を思ふに愛或は憎を以てせよ、彼は必ず之を覺るであらう。愛や憎が強ければ、強だけ彼が之を覺知することが強い。是まで諸君は、故人の回想を有つて居たらうが、今は之を用ゐることを知つて居る。今後は、諸君が故人を憶ふことに依つて、之に幸福を與ふることも出来、又た之を惱ますことも出来る。兩方共に識りつゝ、彼と和睦することも出来れば、彼と腹心の敵となることも出来る。故に、常に善き心懸を以て之を爲せ。然しまた諸君の殘す回



想も、他日諸君自身の爲めになるものなることをも忘れてはならぬ。

六六

死後他人の記憶に、愛慕、尊敬、崇拜、嘆稱等を残すものは幸福である。現世の爲めに盡して身後に遺したものは、死後之を得るのである。是れ彼が、後の人が彼に關して思へる凡てを纏めて意識するからである。生前には、只だ僅に粒を數へた穀物を、死後は、其の俵を得るであらう。是れ實に、吾人が天國の爲めに蓄ふべき財産である。

呪咀恐怖に満ちた記憶の付き纏ふ人こそ不幸である。此世にて彼につき纏ふたものは、死しても彼につき纏ふのである。是れ實に彼を俵つ地獄の一部分である。彼の後より呼びかけ

られたる悲痛の叫は、彼が身内を貫く狙らはれたる矢の如くあるのである。

正義(正當の裁判、賞罰)は、善惡が自ら招げる結果の總體を檢べてのみ行はれるのである。蓋し此世にて誤解された正義の人は、猶ほ彼世に在つても、災殃に惱むが如くに、之よりして難澁せなければならぬ。又た不當の名聲は、不正の人に、外的善として附與せらるゝであらう。故に諸君は、現世に於て、出来るだけ、その名の清からんことを努めなければならぬ。「燈ともを燃もして斗たの下もとにおいてはならぬ。」新約全書馬太傳、第十五章第十六章參照。善行を他人に示せの意。譯者然れども、來世の靈の間には、誤解なるものはない。此世で間違つて秤はかりられても、來世には直され、秤衡の他方に餘る重さが加



六八  
へらるゝ。天の裁判は、遂には、凡て地上の不公平に打勝つのである。

常に死者の記念を起すものは、死者を此處へ呼ぶの方便である。

死者は、吾人が彼等の爲めに營める祭に現はれ、吾人が彼等に建てたる像の周圍に髣髴し、その行爲を讃ふる歌に傾聴する。新藝術の萌芽も此に胚胎する。藝術は既に老ひ、何時も同じく舊劇を舊觀者の前に演ずることは何といふ怠屈であらう。今は突然舊來の觀者の居る下層の土間の上に、之を見卸す高等の觀客の居る棧敷が出来た。今後は藝術の最高の目的は、此上層の觀客を樂むやうに創作することである。然れども、下層

の人も、この上層の者の喜ぶところを喜ぶべきである。

上層の觀客は即ち他界の靈である。新藝術は、此等他界の靈を樂ますを、最高の目的とすべきものである。之と同時に、下層即ち現在の吾人を喜ばすのである。一言せば、新藝術は其感化の範圍目的が一層大となるべしとの意譯者

嘲弄者は嘲弄し、教會は辯護する。一は以て背理なりとなし、他は以て理以上なりとして居る。是れ問題か一秘密であつて、兩者の毫も覺る能はざる幽玄の秘密であるからである。然れども、一旦この幽玄を披けば、嘲弄者の理性の悟る能はざる以所、教會の總意見の全然失敗する以所も、簡單明瞭掌を指すが如くなる。蓋し彼等が見て以て、凡ての法則の例外、或は法則



以上となすものが、是れ最も廣き法則の最大一例に過ぎぬからである。

七〇

基督は、その聖餐に於て、單に粉と水とより成りたる體にて、信者に入るのではない。正に基督を思うて之を享けよ。然らば、基督はその思想を以て、單に汝の身近くに在るのみならず、又た汝の身の中に入らん。彼を考ふること多ければ、彼は多々益々汝の中に在らん。彼を考ふること強ければ、彼は益々強き力を以て汝を強くせん。然れども、若し彼を考へざれば、聖餐は、只だ普通の麵包と葡萄酒とに過ぎない。

## 第六章

死後人が現世に於て最も愛した人と再會し、之と交通し、從前の關係を新にしやうとの、皆人が抱いて居る切望は、嘗て豫想され約束されたよりも、一層完全に遂げらるゝのである。

此世に於て精神的要素が共通であつたが爲めに結合した人々は、次世にて相逢ふのみでなく、此要素に依りて、一體となり生長するのである。該要素は、彼等に共同な精神的肢となり、



而してこの肢は、両者が一樣に意識を以て、自分の有とするのである。

七一

生者相互間に於けるが如く、死者は生者と今や既に斯様な無数の共同の肢に依りて、互に相纏ひて生長して居るのである。然れども死が來て、生者の靈を纏へる肉體の紐を解いてくれば、こゝに初て、此意識結合に、結合の意識も加はるのである。

誰人もその死際には、その靈が既に死んだ人々より受けたもの、或は之と共同に有つたものは、依然として此等故人の靈にも屬することを認むるであらう。故に彼は全くの異客として第三世に入るのではない。彼は久しく俟たれたる人の如く

此に入り、現世にて信仰、知識、愛情の共同なるが爲め、彼が結合した皆人は、喜んで彼を迎へ、自分等の身内のものゝ如くに彼を援ひくであらう。

吾人は、既に昔し第二世を通過した古の偉人、吾人その人の言行に依り吾人の精神を養ひたる古の偉人とも、同じく親密なる間柄となるであらう。故に此世にて、全く基督の中に住したものは、彼世にても、全く基督の中に在るであらう。然し彼の個人性は、一層高尚の個人性の中に在りても消失せないので、只だ此の中に在りて新に力を得、同時に自分の力を強くするであらう。類似の要素の爲めに互に纏ひ合つて生長したる靈は、何れも皆な他の力を自分のものとなし、同時にこの類似の要



素と相繋がれる異種の要素にて、互に規定感化するのである。かくて幾多の靈は、その本質の大部分を以て相互に強くする。又た或る靈は、個々の相一致する要素あるが爲め、只だ結合せらるのみである。

精神的要素の共同なることに基ける此等の結合は、皆な悉く永續するのではなくして、眞善美の要素を有するものゝみが永續するであらう。

自己内に永久の調和を有せない要素は、縦令此世以後に暫時は續いても、皆な後には朽ち、而して一時之にてつまらぬ結合をして居た靈の分離を生ずるであらう。

現世にて發展して、次世までも吾人が持行く精神的要素は、

其の多くは、固より自己内に眞善美の核を有しては居るが、同時に、虚偽、背戾、腐敗等の取るに足らざる多くの餘計な物にて蔽はれてあるのである。此の如き精神的要素にて結合されたる靈は、永く結合してあることもあれば、又た相分離することもある。即ち靈は、善なるものは、之を内に留めて離さず、惡なるものは、その別るゝ惡靈に委ね、或は善靈は善を執り、惡靈は惡を執るのであるからである。

永久に純粹なる眞善美の一形式、一觀念を互に共同して有する諸靈は、此にても結合せられて永久に住こまり、且つかくして自己の一部として永久に調和して之を所有するのである。かくて高等なる靈が、永久の觀念を捕捉することは、該靈が



此等の觀念に依りて、一層偉大なる精神的有機體に結合生長することである。凡て各個の觀念は、一般の觀念に根抵し、一般の觀念は、一層廣き觀念に根抵すると同様に、凡ての靈は、終には肢として、最大の靈、即ち神と結合するであらう。

かくて靈界は、之が完成せば、靈の集合でなくして、靈の樹である。而して、其の根は現世に根さして居り、其の頂は天に達して居る。只だ最も偉大にして最も高尚なる靈、基督諸の天才、聖者の如きが、その質の最良の部分を以て直接に神の内部の高さに生長し達することが出来る。之より小さき劣つた靈は、小枝の大枝に於けるが如く、大枝の幹に於けるが如く、如上の偉大なる靈に根ざし、此等の媒介に依り、間接に最高者の最高な

るものに連なるのである。

逝ける天才や聖者は、神と人との真正の媒介者である。彼等は同時に、神の觀念を與有して、之を人間に通じ、同時にまた人間の苦惱、喜悅、希望を感じて、之を神に通ずるのである。

實に宗教の初に於ては、死者の崇拜と、自然を神として之を崇拜することとは、密接の關係を有し、半ば同一であつた。野蠻人はこの崇拜の最多を有し、文明人は之の最高を有して居る。今日とても、該崇拜の大斷片を、その重要なものとして保存せぬ宗教が何處に在らうぞ。

故に、市には、皆な之に屬する偉大なる故人の殿堂があつて然かるべきである。而して此殿堂は、神の殿堂の傍に、或はその



内に建てらるべきである。同時に基督は在來の通り、神自身と  
同處に拜をがまるべきである。

七八

## 第七章

われら今鏡を以て見みところ昏かぼつ然なり。然ど彼の時には面かほを對あはせて相見ん。  
我われいま知ること全まづからず。然ど彼の時には我が知らるゝ如く我われしらん。

新約全書哥林多前書第十三章第十二節

人はこの世に於ては、同時に外的と内的との兩生活を有し  
て居る。外的生活は、顔容、言語、文章、事業行為等に現はれて、皆人  
の見得るものであり、皆人の知り得べきものである。内的生活

第七章

七九



は内なる思想感情であつて、只だ彼自身のみ知り得るものである。この皆人が見得るものが、外的世界へ入り續くも、是は容易に跡ぬることが出来る。不可見のものゝの續きは、矢張不可見である。されども無いのではない。寧ろ内的生活は外的生活の核となりて、只外的生活がありながら此世の人を越えて彼世の靈まで續き、以て來世の生活の核を作るのである。

實際に、生存中、人より出で、他の生存者が之を見、之を跡ぬることを得るものは、此人より出た一切を網羅せない。吾人が惱中に於ける意識の一運動の傳はる振動は、如何に微妙であつても、(凡て意識の運動は吾人が惱中の内的運動にて傳へらるゝのである)吾人が中に、最後は吾人以外に、同種類の何等か

の作用を生ぜずば、消失することが出来ない。只だ吾人之を外部世界に跡づけることが出来ないだけである。笛はその音を自分だけに留むることが出来ない、必ず自分以外に傳へるのである。吾人が腦も、その通りである。只だ最も手近のものゝみが笛や腦に屬するのである。

源を吾人が腦の活動に發したる極めて複雑なる高等の振動が、吾人が耳目の外的に覺ることの出来る粗笨劣等なる振動の上に廣がることがある。丁度池水の最も細微なる漣波が、大波の上を廣がる如くである。又た別に厚さのない模様繪が、厚き網目の絨氈の表面に廣がつてある如くである、而してこの絨氈は、實に此模様にて、その美と價値とを有するのである。



心理學者は、外部の劣等の振動を認め、之を究むるけれども、彼等が知らざる微妙なる振動を顧みない、之を認めぬにしても、既にその原理を知れば、その結果を否定してはならない。

神経の活動を、化學的作用に歸するも、或は電氣的作用に歸するも、とにかく是は、此に極微の振動が見えぬにしても、畢竟新様な極微によりて起され、或は極微より引連れらるゝものとせねばならぬ。尤もこの場合には、重さの秤るべからざる物質が、秤り得べきものより重要な働を爲すであらう。振動は周圍に廣がるに従て、一見消失する如く思はれやう。若しくは、振動が、その活力の推移の爲め、一時所謂張力(Spannkraft)に變化するとも、勢力保存の原理に従ひ、何等かの形にて、活動の恢復を俟つであらう。

されば靈の現世に於ける外的に覺知し得べき生活の作用

にて、靈から出で、吾人に入り來つたものは、決して靈の全存在を盡したるものではない。靈の本質には、此外的の部分の外に、吾人の知るべからざる方法にて、實に靈の本質の主要部分とも言ふべき内的要素が存在するのである。若し人ありて荒涼たる無人島に生活し、嘗て他人の生活に感化を及ぼしたことなくして、その生を終るも、彼は猶ほ此世にて他人との交際なかつた爲めに得なかつた發展は、之を未來に期しつゝ、その本質に従つて、續いて生活するであらう。

之と同じく、嬰兒生れて直に死するも、決して永久に死するはづがない。一瞬間にても意識の生活があれば、其はその周圍にその感化の圓を畫するのである。丁度極めて短かき音響、只



だ一瞬間で消れたと思はれる音響も、傍に立つて聴て居る人を越えて、無窮へ音を送出す圓を自分の周圍に畫くと一般である。如何なる活動も、自己内に消失することはない、何れも同種類の新しき影響を永久に生ずるのである。それで嬰兒の靈も、無人島に孤獨に暮した人の靈と同様に、其の最初の意識生活よりして發展するであらう。只だその方法が、既に多く發展した者の發展すると異なるだけである。

人は死に於て初て、生時に他人の靈に産じたものを充分に自覺するやうに、又た是まで自己内にて爲したものを、また死に於て充分に自覺し、且つ之が用法を知るやうになるであらう。彼がその生時に、精神的寶庫から集めたもの、その記憶に満

たすもの、彼が感情に浸潤するもの、彼が理性、彼が想像力の作つたもの、是等は皆な永久に彼が有として存在するのである。然し凡て此等の連絡關係は現世にては不明であつて、吾人は之を知ることが出来ない、只だ思惟が、その炳たる燈を提けて、此中を通過し、その進んで行く狭道に在るものを照らすのみであつて、他は窈然として暗いのである。靈は現世にては、決して一緒に其自身の全内容を知ることが出来ない。只だその一要素が新要素を招いて結合し、以て一時暗黒から浮出づるけれども、直に元のまゝに闇黒に沈むのである。然れば、人は自己の靈中に於ける知らない客であり、偶然に従ひ其中を迷ひ歩くのである。或は面働にも、推論の紐を辿りて、その道を求めて居



る、而して思惟の燈より離れて、靈の廣野を蔽へる闇黒内に潜伏する最良の寶を、往々にして逸することがある。然れども、死の瞬間には、永久の夜が肉體の眼を蔽ふけれども、靈に於ては白日が明け初むるのである。その時には、内的人間の中心點が、太陽の如くに燃え、以て自己内の一切の靈的のものを照らし、同時に内的眼にて、超世界的明晰を以て、事物を透徹し見るであらう。現世にて忘れた一切を、此に再び見出すのである。否、只だ次世にて彼が前に現はれんが爲めに彼は之を此世にては忘るゝのであり、彼は今此に皆一切が集められてあるのを見るのである。この新して普遍的明瞭の爲めに、彼は今や、その結合せんとするものを、煩はしく集むるを須むない、その區別

せんとするものを、その特性に従て分類するを須むない。只だ一目して、自己内の一切同時に觀せられ、一致矛盾の關係、結合分離、調和不調和の關係、單に思惟の馳する一方向のみならず、同時に、有らゆる連絡方面が分明になるのである。魔睡劑、死、睡眠、遊等にて死に近ける時に、上述の如く、精神の内容が明瞭に近づく例あり。飛鳥の翱翔と視力とは、自己の鈍き歩行中觸るゝものゝ外何物をも認めざる螟蛉アキハムシの遅々たる匍匐に遙に超越する。あの高等の認識は、丁度之れと同じく、吾人が認識に超越するのである。死に於ては、人間の肉體と共に、その感覺、悟性、この有限的生活の爲めに出來たる精神の全構造は、皆敗滅に趣くのである。此等は靈の生活には餘り窮屈になつた形式である。又た事物の新秩序に於ては、靈にはもはや無



用なる肢である。此新秩序に於ては吾人が現世にて如上の諸機關を以て、個々に不完全に、骨折りて到達せなければならぬものを、靈は一齊に直接に之を有し、之を觀し、之を享樂するのである。然れども人の個性は、現世の諸形式諸機は破壊せらるゝとも、その擴張發展に於ては、毫も毀損せられないで、依然として存在すであらう。而して此等の消失した劣等の活動の代りに、高等の生活が來るであらう。思想の不安も、みな鎮靜に歸し、思想今や自己を見出さんが爲めに、自己を探がすの必要もなく、又た相互の關係を知らんが爲めに、相互に運動接觸するの必要もない。此の代りに靈と靈との高等の交通生活が始まるのである。思想相互の交通が吾人の精神内に於て起る如く、

靈と靈との交通は、一層高尚なる他の靈内に於てするのである。此高等の靈若しくは一切を結合する其の中心點を、吾人は神と名づくる。吾人が思想の活動も、實に此交通の一分枝に過ぎぬのである。今は互に了解するに言語も要らない、他を認むるに眼も要らない。丁度吾人に於て思想が思想を了解し、之に感化を及ぼすに、耳、口、手の媒介を要せぬが如く、又た思想が外よりの連鎖や隔壁がなくして、他と結合し他と離るゝが如く、靈の相互間の交通生活も、正に此の如く、秘密で、親密で、且つ直接であらう。靈相互間には、最早や隠れたものがなからう。現世にては精神の暗黒内に潜める凡ての邪念、世に現はれざらんが爲めに有らゆる方法を用ひて隠蔽せんとする事、此等は、凡



ての靈に皆悉く明かになるであらう。只だ此世に於て、純潔眞實であつた靈だけが、次世に於て、相見わて耻づる處がない。此世にて誤解された人も、彼世にては正當に認識せらるゝであらう。

靈は自己を透徹し見るに由つて、また自分自身に於ける凡ての缺點を識り、未だ完成せられないで、擾亂的で不調和である現世からの殘留物を知るであらう。靈は此等の缺點を認識するのみならず、また之を感じることも、吾人が身體の不具を感じる如く甚だしくあるであらう。吾人に於ては、思想は、その思想内の不健全なるものを淨め去るに思想を以てする。又た思想は、その共通の要素にて、互に結合して高等の思想となり、以

て各自にその缺くる所を補ふのである。此と同じく、靈もその相互間の交通に於て、その完全の域に達する進歩の手段を見出すであらう。



## 第八章

人は一生中、單に精神的のみならず、また物質的にも、自然と交通して居る。熱、空氣、水、土は、諸方から人の内に浸入し、諸方から人の内より流出し、その身體を作り、身體を變じつゝある。此等は、人間以外にては、只だ相並んで流動するが、人間内に於ては、相會し相結合して、以て一の仕懸を成すのである。此仕懸は、人間の肉體的、一般感情を、從つて之より一層內的なる凡ての

精神的要素を、外界の感覺より隔つるのである。人は、只だ感官なる窓を通じて、その肉體的家より外界を覗き、且つ之を感じるのである。言はゞ手桶にて少しく之を酌むやうなものである。

然れども、人が死すれば、その身體の頽敗と共にこの仕懸も解け、今や之にて束縛せられぬ靈は、充分の自由を以て、自然界に浸透するであらう。靈は今や、目や耳を打つ光波や音波を感せずして、エーテルの海、空氣の海に流轉する。此等を感じるであらう。今や靈は、其體が斯様な海に浴して、風が之に當り、波が之に寄するを感じるのみならず、彼自身かやうな大氣の海に颯として遊行するであらう。また今や、外的に森や野の緑の裏



を飄流しないで感じつゝ此等に浸透し、且つその中に逍遙する人に浸透するのであらう。

九四

故に人は、高等の階段に移りても、何物をも失はない。只だ失ふものは、此世の機關だけであるが、此機關は、その用不完全であつて、新生活には無くても済むものである。現世なる生活の低い階段に於ては、あの機關の遲鈍なる媒介にて、只だ外的に個々に近づけるものを、新生活にては、凡て完全に直接に之を自己中に有し、且つ感ずるからして、かやうな不完全なる機關は必要でないのである。吾人は生ける自然の泉より、光や音を掬むのである。吾人が未來生活の波動は、光波や音波と同一に歸すであらうのに、吾人は何故に次世までも、耳や目を携へ行

くべきであらうか。たゞ之のみではない。

人間の眼は地上に於ける、太陽に類似の一小點に過ぎない、而して廣き天全體中輝ける小點の外何物をも知らない。天に關して此以上を知らんとする欲求は、此世では、實現せられない。

人は望遠鏡を發明し、之を以て事物の表面を擴大し、眼力延長を計るけれども、駄目である。星は依然として小點である。

是に於てか、人は現世が與へぬものは、次世にて達することが出來やうと思つて居る。天國に至りて後ちこの地上にての眼に隠匿して居るものを、みな明らかに見、以てその知識慾を充たすと思つて居る。



なるほど、尤である。然し彼は星より星に移り、しかもあの見  
 ゆる天を越へて、他の見ゆる天に飛上らんが爲めに翼を得て  
 以て天國に入るのではない。元來事物の性質上、此の如き翼が  
 何處にあらうか。一の星より他の星へ、次第々に生れ換りて、  
 以て天を皆な見るのでもない。星より星へ小供を連れて行く  
 鶴も居ない。又た人の眼が、最大の望遠鏡となつて、天の最大距  
 離をも見通す視力を得るのでもない。地上の視力の原理は不  
 足なのである。彼は、彼を載せて居る天國の大なる存在の意識  
 ある一部であつて、この存在が、他の天國の存在と、光線的交通  
 を爲すに當つて、自分も意識して之に與るのである。之に依り  
 て、彼は凡て如上の光明に達するのである。是れ實に新視力で

ある。是れ現世に居る吾人には適せぬ視力である。是れ丁度、吾  
 人が現今の視力が天國に適せぬ如くである。地球その物が、大  
 なる目であつて、天の中に翱遊し、全然星の光の海に浴し、千萬  
 無量に相交錯するも毫も破壊することなき凡ての波濤を諸  
 方より受けんが爲めに、この光の海に輾轉反側して居る。人は  
 いつか、この眼にて天を見ることを學ぶであらう。是れ未來生  
 活に浸透する彼の波動が、該生活を圍繞するエーテルの外的  
 波動を迎へ、且つ之に反對して、最も微妙なる振動にて、天に浸  
 透するからである。

見ることを學ぶ！吾人は死後、猶ほ非常に多くの事を學ば  
 なければなるまい。吾人は次世に入るや早々、來世が供する完



全なる天の明瞭を、自由に使ひまわすことが出来ると思てはならぬ、この世にても、嬰兒は、最初は、視ること聴くことを學ばねばならぬ。嬰兒が最初に見聽する所は、了解されない光景や音響であつて、此には何等の意味もなく、最初は只だ眩惑困難さへもあるばかりである。次世にて、新來者の新感官に於ても最初は丁度この通りである。只だ人が現世より持つて行つたもの、總て此世にて自分があつたもの、考へたもの、爲したものの回想記憶は皆悉く、かの世に入るや否や、忽然之を自己内に明白に見ることが出来る。然しこれだけにては、彼は依然として在來の人であるのである。又た來世の光明は、懶惰者、愚者、惡人等をして、自己の行爲の之への不調和を感せしめ、以て終

にはその行を改めしむるに至るの外、彼等に他に何等かの利益があると思つてはならぬ。既に此世に於ても、人は天地の莊麗を見るの眼、音樂、人語を知るの耳、凡て此等の意義を解するの悟性を有して居る。然れども、是等は、愚者、懶惰者、惡人には何の益する所があらうか。

現世の最善最高のもは、只だ最善最高の人に取りてのみ、かの世にても最善最高のものである。是れ實に只だ最善最高の人のみか了解し、意志し、且つ作つた所のものであるからである。

それでまた、來世に於ては高尚なる人にして初て、自分を載せて居る天人と、他の天人との意識的交際を了解することが



でき、且つ其の手足となりて、この交際に與ることが出来る。

此地球は終には、徐々に、より小さな圓を畫いて太陽を回り、幾億年の後には、元とその飛出した太陽の懷に歸り、而して、凡て地上の生物は、新に太陽の生活を始めぬかは、誰が之を知らう。吾人今ま既に之を知るとして、何の用があらうか。

## 第九章

第三階段の靈は、人類自身もその一部であるこの地上自然界に住むのであつて、言はゞ一の共同の體に住むで居るのである。而して自然界の凡ての作用が彼等に於けるは、丁度今ま吾人が體の作用が吾人が靈に於けるが如くである。彼等の體は、共同の母として、第二生活階段の諸體を包含して居る。丁度第二階段の體が、第一階段の體を包含して居るが如くである。



然し第三階段の靈に於ては、その共同の體の中で、彼等が各此地上にて養成發展したものの、み、彼が特有の部分となるのである。此に一人がある。彼が居なかつたら出来なかつたもの、彼が居たから出来たものがあれば、此物は、存在の共同の根の上に出來た彼自身の新しき存在である。

靈に於ても、固定の組織機關と、活動循環する働きの二つがある。丁度吾人が今日の體が、固定したものと、この固定したものに據所を有する、變するものからと、出來て居る如くである。さて、來世の靈の生活を載せてる存在の範圍は、皆互に交錯入込んで居る、此に於てか疑問がある。此の如く無數の範圍が、相交錯して損はず、迷はず、亂れざる以所は如何。是れ出來得べきであらうか。

きであらうか。

然し、先づ是から問ふが宜からう。無數の波動が同一の池の中に交錯し、無數の音波が同一の空中に相交錯し、無數の光波が同一のエーテル中に交錯し、無數の記憶の波が同一の腦中に交錯し、最後に、無數の人間生活の圓が、來世の胚胎する此圓が、既に此世に於て相交錯して毫も紊れず、毀らず、迷はざる以所は如何。是れ出來得べきであらうか。先づ之を考ふるが宜い、否な、却て無數に交錯することに依りて、現世及び來世の高尙なる生活、波動、記憶の運動等が成立するのである。

然らば、互に相交錯する意識の圓を區別するものは何であるか。



此等は個々の點 (Einzelnheiten 全體の反對各部分、細かな事—譯者) に於て相交錯するのであるが、此個々の點に於ては、如何なる處にも、何物も彼等を區別するものがない。凡て個々の點は、彼等に共通して居る。然れども、共通して居る有様が、彼等各々に於て異つて居る。是が全體に於て、彼等が互に相分れ、一層高き個々の點に於て區別せらるゝ以所である。相交錯する波圓を、何が區別するかを再び問へ。個々の點に於ては、區別するものがない。然れども、全體としては、容易に之を區別することが出来る。內的に相意識せる圓は、一層容易にまた內的に、互に區別することが出来るやう。

諸君は恐くは既に屢々、遠隔の地より、文句が縦に書いたり、

横に書いたり、入れ雜つて書いてある手紙を受けたことがある。諸君は、何に由つて、此等縦横の文句を區別するか。即ち各が有する文字意味の關係に由り、之を區別するのである。宇宙なる紙に書いてある精神的文句も、丁度同様に、縦横に入り雜りて居る。各文句は、只だ自分丈けが獨りある如くに、自身自身に讀め、同時に之を横ざる他のものも、おのづから讀めるのである。勿論宇宙には、只だ二様の書き方があるでなくして、無数の文句が相交錯して居るのである。然し此手紙の譬喩は、世界の實相を充分現はすことが出来ない。

然れども、意識はその地を斯く廣く擴げて、如何に自己の統一を保つことが出来るやうか。識闕の法則があるのに如何して



之を維持することが出来やうか。

106

身體と精神との關係の此經驗的法則は次の如くがある。意識の據れる身體的活動が闕と稱する強度の一定度以下に沉むるとき、意識は消失するのである。該活動が廣がれば廣がるほど、該活動は弱くなり、闕以下に沉み易いのである。全意識は其の闕を以て居る、即ち眠と覺との境界が是である。同様に意識の特別のものも、また其の闕を持つて居る。即ち、覺醒中、或は甲觀念、或は乙觀念、意識内に出現し、或は消失する。是はこの甲や乙の據れる特別の活動が、特別の闕に上り、或は下るに従つて、かく出現消失があるのである。

然らば先づ下の問を起すが宜い。意識は身軀内に擴がりて、如何にその統一を保持することが出来るか。靈のあの大きな

擴がりとは、實に此身體内の小さな擴がりの續きに過ぎないのである。身體や腦は、一小點であるか、或はその中に靈の座として、特別に中心點があるか。否な、かやうなものはない。身體の諸關係の一小結合を作るのが、現世の靈の性質であるが、丁度之と一様に、より大なる體の、より大なる結合を作るのが、未來の靈の本質である。神の靈は、しかも宇宙の全結合を作るのである。諸君は、また神を一點に求めやうとするであらうか。神は至る處に存在するのである。諸君は他日大に此遍在に與るであらう。

諸君は、未來生活の波は、これが廣がつても、此世の生活の波が達した闕には達せぬと心配するかも知れぬ。然るときは、之



を思へば宜い。未來生活の波は、決して空虚な世界に廣がらない。若しさうであつたら、深淵に沈んで仕方がなくなるであらう。故に之が廣がるのは、神の永久の基礎であると同時に、諸君が靈の基礎である所の世界に廣がるのである。萬物は、只だ神の生活の基礎のみに生活することが出来るからである。

上述の考察が混合關(Mischungsschwelle)混合若しくは複合の精神要素から成立つ識關の精神物理学説(之に就いての極めて明瞭なる説明はゾントの哲學研究第四卷二〇四頁及び二一一頁参照)と矛盾に見ゆることがないやうに、次のやうに説明を加へて置く。諸種の構成要素から結合して出來た精神物理的の人間の生活の波(上記の此簡單なる言葉を引續き利用する)が只だ他の種類の構成要素のみを包含してゐる世界に入り

廣がる時には、此生活波は其の展開によりて問題の混合關の下に落つるであらうことは勿論假定すべきであらう。然し世界の精神物理的の波の海は、其の構成要素の中に人間の生活波の構成要素と同類であるもの、しかも有らゆる異りたる高さや強度の構成要素をも含み、從てまた混合關をも既に越え、或は其に接近し、而して參加した同類の構成要素の爲め、只だそれだけ多く高めらるゝ要素をも含むのであるからして、上述の考察の結果は、多少一層確固たる方法にて再び得らるゝのである。(第三版の註)

錨雀が、鷺の背にうち乗れば、自分獨りでは、容易に飛ぶことの出來ない高い山の頂上を容易に越ゆることが出来る。而して最後に、鷺の背より飛んで、鷺の高さより少しく高く飛ぶことが出来る。然し、大きな鷺も、小さな雀も、同様に共に神のもの



である。

吾人は死後、如何にして脳髓なくして済むであらうか。脳髓は實に巧妙なる構造である。自己の靈の凡ての活動を載せ、又た靈の活動に依り一層發展し、一層有力で充實せる活動を載するのである。此の如き構造が今や無用であらうか。

先づ植物を見るが宜い、植物がその種子を破り、生長して光線に浴するの後、如何に種子がなくなつて済むかを考ふるが宜い。種子は實に巧妙なる構造である。その内部の胚種の發生に依りて、自ら進んで發展するのである。此の如き構造が今や何の用もなさぬであらうか。

然れども、吾人以外に、何處に、來世に於て腦の代をする、腦の

如き巧妙なる構造があるか、何處に腦に優るものさへあるであらうか。來世は實に現世に優つて居るとせなければならぬものである。

然れども、既に諸君の全身體が、目や耳や、乃至、腦や、若しくは他の部分よりは、一層立派なる、一層高尚なる構造ではないか。然らば、人間が、國家や、科學や、藝術商業等と、僅かその一部をなす世界は、この一部のまた一部たる、諸君の小さな腦に勝ること萬々である。諸君は一層高尚なる見識を得んとならば、地球を以て、單に乾いた土や水や空氣より成りたる球とばかり見ではならない。地球は、諸君より立派なる高尚なる統一的の活動である。諸君が以て地球の生活に毫末を貢獻する諸君の小



さき腦に於て有するよりは、一層不可思議なる生活云爲をその表面に有する天の活物である。諸君は、諸君が身の周圍の生活を認識することが出来なければ、來世の生活を夢想することも出来ぬ。

解剖學者が人の腦髓を見る時、何を見るであらうか。彼は只だ、白き纖維の混沌を見るばかりであつて、之が意味を解くことは出来ない。腦自身は、自己内に何を見るであらうか。光線、音響、思想、記憶、想像、憎愛の情等の一世界を見るのである。之と同じく、諸君が世界の外に在りて之に見るものと、世界自身が自己に於て見るものとの關係如何を考へて見るが宜い。然らば、諸君は、世界は全體に於て、その外形と内部と相似ないことは、

世界の只だ一部分たる諸君に於けるより、一層甚だしくあるを承知するであらう。只だ諸君は、世界の一部であるからして、從て諸君は、世界が自己に於て見る所の一部をも諸君自身内に見ることが出来るのである。

最後に恐らくは猶ほ疑問が起らう。吾人の更らの體ともいふべきものを、來世に於て覺醒せしむるものは何であるか。吾人は實に此體を既に現世にて此地上に突出したのであり、而して今や其は吾人が窮窟なる現世の體に續きであるのである。之を目醒めしむるものは何であらうか。

即ち此窮窟なる體が眠ること、否な朽ちるといふことが、之を覺醒するのである。是れ現世を一貫する普遍的法則の一例



に過ぎないのであり、従つて該法則は、現世を超越して、來世にも通ずるといふ證據である。汝等懷疑者は、只だ現世のみよりして推論せんと欲して居る。さればかく推論せねばならぬ。

意識の活力は、決して眞に新に出来るものでもなければ、又た決して亡びるものでもない。丁度該活動の由れる身體の活動と同様に、只だその位置、形式、其の廣がる方法等を時間的若しくは空間的に變ずるのみである。只だ今日沈めば明日現はれ、今日現はるれば明日沈み、此處に沒せば他處に出で、此處に出づれば彼處に沒するばかりである。(一)諸君は、目が見張をせんが爲め、自覺を以て見んが爲め、耳を眠らせなければならぬ。内部の思想が醒めん爲めには、外部の感官を眠らせなければ

ならぬ。一小點に於ける傷が諸君が全精神の意識を全く盡すことがある。注意の光が廣がれば、それだけ之が各部を照すことが弱い。この光が明瞭に一點を照すこと強ければ、従て他は暗黒になるのである。或物を照すとは、他のものより引取ることである。諸君が今日の覺醒は、昨日來の眠に依るのである。今日眠る深ければ、それだけ明日は覺醒して活潑である。覺醒活潑であればあるほど深く眠るであらう。

(一)物理界に於ける所謂勢力保存の法則に類似せる此法則は、精神と肉體との關係に依り、物理的法則と關係あるや疑を容れない。但し此關係は、明白には證明されない。又た精神物理的活動の根本性質が明白にされざる以上は、精神活力の保存の規則を、物理的勢力保存の法則より導くことも



出来ない。故に該法則は、上述の如く、事實より推せなければならぬ。其は精確に普遍的効力あるや否やは證明し能はざるも、事實的なるが爲め充分の或然性を有し、以て此に必要な論の基礎と爲すに適して居る。

然し此世に於ては、人は畢竟常に只だ半眠を爲すに過ぎぬのである。是れ舊ふるからの人が其處そこに居るからして、この半眠は、此舊人を再び目醒めしむるのである。死に至て初て全眠があるのである。是れ舊からの人は、今は居ないからして、新しき人を目醒めしむるのである。然れども、在來の法則は此にも猶ほ依然として有効であつて、舊意識の補充を要求し、舊の體の續きとして、新しき體が存在する。故に新しき意識が、舊意識の補充繼續として出現するであらう。

舊意識の繼續！老人の身體は、小兒の身體の一微分だも有せぬけれども、小兒の體が有して居つた意識の繼續を有して居る。丁度同一の理由よりして、來世の體は、老人の體の一微分だも有せぬけれども、老人の體が有して居た意識を繼續して持つて居る。是れ後より來る體は、何れも以前の意識を有して居つた體の活動結果を自己に保存し、之にて出來上つたものであるからである。故に現世の生活を、今日より明日に、現世より來世に續けしむる一原理があるのである。是れ人間の永久保存の永久的原理にあらずして何んであらうか。

諸君が現世にて云爲して世間に及ぼし而して諸君の外に出た事業効果は、單に諸君の外に出た如何なる他の事業効果



よりもより多く諸君に属すべきものである。是れ何の故であらうか問ふに及ばぬことである。その理は則ち是である。前者が後者より遙に多く諸君より出たからである。凡ての原因は、之が永久の所得として、之が結果を有して居る。然し諸君の行為結果は畢竟決して諸君以外に出づることはない。是等は既に現世に於て、諸君自身の無意識的の繼續であつて、只だ新意識に覺醒せんことを俟つて居るのである。

人は一度生活したら、死ぬることが出来ないと同様に、以前に生活して居なかつたら、生活に覺醒することは出来なかつたであらう。只だ彼は、以前には單獨に生活せなかつただけである。吾人が未來世に覺醒するは、現世の生活があるからである。然し、現世の生活は獨立單獨のものではない。下文に明かである。譯者 嬰

兒が生れる時に生ずる意識は、永久に存在する普遍的、神的意識の一部であつて、之が生れた新靈魂に落付いたのである。吾人は、勿論、身體の活力と同様に、意識の此活力を追踐尋釋することは出来ない。

然し人間の意識は、普遍的意識から生れたからして、再び此中に戻り失はれはせぬかと恐るゝならば、請ふ木を見るべしである。枝が幹より生ずるには、幾星霜を経過した。然れども、一度出たら、枝は幹に戻り没することはない。若しかやうなことがあつたら、木はいかでか生長し發展することが出来やう。宇宙の生きたる木も、同じく生長し發展するのである。

以上述べたもの、是れ現世よりして來世を定むる推論の



妙訣である。是は吾人が知らざる基礎、或は吾人が自分で作った假定から推論するのでなくして、吾人が知れる事實から、より立派なる高尚なる來世の事實を推し、之に依りて、實踐的に要求されたる、高尚なる見地に繋がる信仰を下より固め且つ支へ、而して、之を人生と生ける關係に置くにあるのである。吾人信仰を要せずば、何の爲めに之を支へやう。然れども、支柱がなくなれば、どうして之を用ゐやうぞ。

## 第十章

人の靈魂は、その全身に行渡りて居る。靈魂が去れば、身體は朽ちる。然し、意識の光は或は此處或は其處と位置を變ずる。

之は科學的に次の如く言ふことが出来やう。意識は、精神活動の下に在る精神物理的と稱する身體の活動が關と稱する強さの程度を越ゆる時は、又た越ゆる處には、意識は其處に存在し、覺醒して居る。それで意識は時間と空間とに位置を定めらるゝことが出来る。吾人が精神物理的活動の



波の絶頂は、言はず、場所より場所に移り、意識の光はその位置を變ずるのである。只だ此絶頂は現世の生活の間は、吾人が體內に、否な體內の限られたる部分に、あちこちに動搖し、睡眠中全く闕下に沈み、覺醒して再び闕以上に上るのである。精神物理学ニ著スルニ、四十一、四十二、四十三、

吾人は、丁度意識の燈が狭き體內にあちこちに周行して、目耳、内部感覺、外部感覺と、代る／＼之に照してやるのを知つて居る。最後に、死に至りて、全く體內を出で、漂泊する。恰も自分が多年、内にあちこちして居た小さき家が破れて、未來永く世間に出で、新に漂泊を始める人の如くである。死は、漂泊を狭き場所より廣き場所に變せしむる外、別に兩生活の間を隔つるものでない。現世に於ては、意識の燈は、前後相繼ぐことは出來、

又た何處へも廣がることは出來るけれども、何時でも在り同時に凡ての處に在ることは出來ぬ。未來生活も同様である。只だその漂泊の場所は、極めて大きく、その擴がりも廣く、道は自由で、展望の場所は高くして、現世のより低き一切を網羅して居る。

既に現世に於ても、例外であつて極めて稀ではあるが、意識の光が狭き體より廣き體に飄遊し、或は遠き空間に起れること、若しくは廣き空間的關聯に根ざして遠き未來に起ることの報知を齎らして歸ることがある。蓋し未來の長さは、現在の廣さに基づくものであるからである。現世と來世との間の、平常は閉ぢられてある戸に、突然少しく隙が開き、忽ちにして復



た之が閉ぢることがある。此戸は死の時に全く開くであらうが、實は其時初て全く開くことになつてゐて再び閉ぢないのである。死以前に此隙より覗く<sup>のぞ</sup>だにすることは勿論無用である。然れども、現世の生活法則の此例外は、現世、來世兩方を同時に包含する、より大なる法則の一例に過ぎぬのである。

時としては、此窮窟なる體が、他方面に於て、異常なる方法にてその制限を越えて覺醒せんが爲め、一方面に深く眠ることがある。然し是は再び覺めぬ位、全然且つ深く眠るのではない。又大なる體が、或る一點に於て、非常に強く刺戟せられ、以て平常は近づく可らざる遠方より、鬨以上の影響を、吾人の狭き體に及ぼすことがある。是に於てか、千里眼、豫感、前兆の夢等が

ある。若し未來の體と來世の生活とが、只だ作話であるならば、是も作話に過ぎぬであらう。さもなくば、是は未來體の標徴、來世の前兆である。標徴あるものは存在する。前兆あるものは來るであらう。

然れども、是等は現世の健全なる生活の徴候でない。現世は只だ、來世の爲めに、來世の體を作るべきであつて、來世の眼を以て見來世の耳を以て聽くべきではない。時節の至らぬに開く花は榮むない。來世の信仰は、上述の如き、來世が現世へ閃めき入つた痕跡の信仰にて、之を支ふことは出來るけれども、此上に來世の信仰を築き上げてはならない。健全な信仰は、理由の上に出來上り、健全な生活の最高の見地に至りて終り、信



一二六  
仰其物が、生活の健全、その最高の見地の歸着に必要であるのである。

諸君は是まで、死者が諸君の記憶内にて諸君に現はれた髣髴たる形態は、眞に諸君が内部の空影に過ぎないと思つて居つたらう。諸君は間違て居る。是れ生ける彼自身であつて、意識的進行にて單に諸君に見ゆるのみならず、諸君の内に入來るのである。彼が生前の形態は、今ま猶ほ彼が靈魂の衣裳である。今は只だ、以前の固定の體を以て煩はさるゝことがなく、以前の體を引ずり遅々として行くことがなくして、地上の荷を脱し、透明であり、輕快であり、忽ちにして此處に居り、忽ちにして彼處に行き、以て己れ死者を呼ぶ聲に従ひ、或は自分から諸君

の處に行き、以て諸君をして、該故人を回想せしめて居る。古來死者の靈を以て、輕快で、形態がなく、空間の制限から離れたものと想像して居た。是れ正當な見解のつもりではなかつたけれども、實は正鵠を得たものであつた。

諸君はまた必ず幽靈の出現の話を聞いたことがあらう。醫者は之を幻想とか幻覺とか名づけて居る。なるほど、是は生ける吾人には幻想幻覺である。然れども同時に所謂死者の實際の出現である。吾人が記憶内の一層微弱なる形像さへ、實際の現象である以上は、是より一層強き幽靈の像が、どうして一層實際でないことがあらうか。幽靈は、幻想であり、同時に實際である以上は、是が一であつて、他であらぬと争ふの必要はない。



諸君は、既に諸君自身内の幽霊と等しき記憶像を恐れない以上は、今後幽霊を恐るゝことはない。

とはいへ、幽霊を恐るゝ、全く理由が無いではない。幽霊は、諸君が自分で呼び起した像影とは異り、或は諸君の内の生活の關聯中に自ら（そのうちから）静に且つおとなしく入來り、以て内の生活の發展に貢献する像影とは異なり、呼ばれずして入來り、襲ふが如くに到り、剛然として之を拒ぐことが出來ず、宛然として諸君が面前に現はれ、實際に諸君が内に入來り、諸君が内の生活の組織を紡ぎ續けるよりは、寧ろ之を引裂くのである。是の如き現象は、現世及び來世、兩ながらの病的存在である。死者と生者は、此の如き方法にて交通すべきものでない。死者が互に相見る

が如きと殆んど同様に明瞭に、同様に客觀的に生者が死者を見るは、生者も半ば死んだものといふべきである。是れ死者の出現に對して、生者の慄然として懼るゝ以所である。斯様な現象は、死人が死の向の國から、死の此方の國へ、半ば逆行したるものである。故に、かやうな傳説がある——單に傳説に過ぎぬであらうか——即ち、未だ全く解脱せない、現世の重き鎖を纏へる幽霊のみが彷徨すとの傳説がある。不祥を掃ふには、善なる強き靈の援助を乞へ。然し最善最強の靈は、一切の靈の上に位する靈である。此靈の保護の下にあれば、何者が諸君に加ふることが出來やうか。神の名を呼べば、諸の惡魔逃去るとの傳説は、また實に之と一致して居る。



然し精神病の此範圍に於ては、信仰自身が迷信の病に罹り易い。幽靈の出現を妨ぐる最簡單の方法は、其の出現を信せぬことである。其の出現を信するは、是れ途中に之を迎ふると同様であるからである。

予は上に死者が互に相見る如しと言つた。現世の秩序に反する斯様な現象は只だ來世の秩序より豫期すべきものである。來世の住民は、其形態に於て澄明にして充滿に、明瞭にして客觀的に相見ね、而して吾人は彼等の回想に於て、只だ其形態の微影、朦朧たる輪廓を有するのみである。彼等は、其の全存在を以て互に透徹する、然し只だ彼等の全存在の一部分が吾人が彼等を回想するとき、吾人の各に入るのである。彼等を得る

には、來世に於ても、現世に於ても、同様に、之に充分の注意を集むることが必要がある。

そこで或は問を起すものがあらう。斯様に彼等が相互に浸透しながら、それでも猶ほ相互に客觀的に且つ判然と區別が出来来るやに見わるのは、如何して可能であるか。然れども先づ次の事を考ふるが宜い。一生存者の現象として吾人の内に入り、或は一故人を回想するとき、吾人が腦に浸透するものが、(かく見るより他に方法はない)直觀として客觀的に、或は記憶として判然と區別が出来て吾人に見ゆるのは、何故であらう。回想の基礎になつて居る作用は、それ自身判然と區別がついて居らぬけれども、此作用を最初起した形態を、分明に吾人が



前に現はれしむる。吾人は現世のことに就いてその何故なるかを知らない。何んぞ來世に關して、之を知らんと欲することが出來やうか。

それで予は重ねて言ふ、諸君が知らぬ現世の理由より推定してはならない。又た諸君自身が作つた假定より推斷してはならぬ。諸君が知れる現世の事實より、來世の、より立派なる、より高尚なる事實を推せなければならぬ。個々の推定は、誤謬に陥ることもあらう、只だ吾人が作つた推定も同様である。故に個々には重を置いてはならぬ。諸種の推論が、會合一致して、凡ての推論に先んじ、凡ての推論を越えて吾人が要求せねばならぬものゝ方向に向へば、是こそ、吾人が信仰の下からの支柱

となり、同時に上への案内ともなるのである。

然し、若し諸君にして、信仰を直に上から得るならば、吾人が登つて來た信仰の道全體が容易く崩れ落つるであらう。



## 第十一章

「人は神に住み、神に動き、神に存在する」この千年以上も人が弄して居た言葉の中には、言葉以上のものがある。此道理によく習熟さへすることが出来れば、如何に萬事信仰に好都合であらうよ。然るときは、神の永遠の生命の信仰と、吾人自身の永遠の生命とは同一である。吾人は、吾人自身の永遠の生命は、神自身の永遠の生命の一部であることを知り、又た現世の生活

を越せる未來生活の高みのあるは、吾人が既に吾人自身の内にも有つて居るやうな低き建物の上の、より高き建物が神の内にあることであるを知るのである。吾人は卑近なる例にて、高尚なるものを知り、卑近高尚、兩者を綜合して、吾人は只だその一部たるどころの全體を了知するのである。

吾人の内の直観インスピレーションが消失れば、記憶が之れから吾人の内に現はれる。神の内に於ける吾人の現世の直観生活が總て消失れば、一層高尚なる記憶生活が、神の内に之から起る。記憶が吾人の頭内にて交通する如く、來世の靈は、神の頭内にて相交通する。是れ同一の階段中に於て、一階級登つたゞけである。此階段は神へ登るべきものでなく、神の中に在つて、上へ登つて居る



ものである。神は階段の基底も絶頂をも、自己内に有して居るのである。前に述べたあの空虚と考へられた言葉としての神は如何に空虚であらうぞ。然し充實せる意義の神は如何に豊富であらうよ。

諸君は、直観の來世が如何に諸君の靈に於て可能であるかを知るか。諸君は、只だ來世は實際に在ることをのみを知つて居る。然し來世は只だ靈に於てのみ可能である。それで諸君は如何に之が可能であるかは知ることが出来ぬけれども、諸君の靈全體の來世が、一層高尚なる靈の中に實際在るといふことは、容易に信することが出来る。これには諸君は一層高尚の靈が存在するといふこと、及び諸君はこの高尚の靈の爲めに

在ることを信するのが必要である。

次に神は萬物に生活し、萬物に活動し、萬物に存在すとの言葉に眞理を見ることに習熟することが出来れば、如何に萬事信仰に好都合であらうよ。然らば、吾人が、未來の體を作り、以て神の家の内に、新しき家を建てるのは、死んだ世界からでなくして、神に依つて生きて居る世界からである。

然れども、生命を與ふる此信仰は、何時生命ある信仰となるであらうか。

此信仰が、生命を與ふるものであるといふ事實が、正に之をして生命あらしむるであらう。



## 第十二章

諸君はあるか否やを質問する。予は其の如何にあるかを以て答とした。信仰があればあるか否やの問は無要である。然し一旦問が起れば、之に對しては、如何にして在るかといふ唯一の答のみしかない。如何に在るかといふことが確乎動かざるに至るまでは、あるか否やの問は、反覆繰返されて、已むことはなからう。

此處に木がある。其の一つ／＼の葉は落つることがある。然し其の根や其の幹枝は堅固で整つて居る。新しき枝は常に出で、葉はまた常に新に落つるであらう。然し、木自身は倒れない、のみか、美しき花を生じ、信仰に根ざすことの代りに、信仰の實を結ぶであらう。



## 第一版の跋

此書に詳述されてある死者の靈が、個人として生者の間に引續き生存するとの思想を予が最初起したのは、當時ライプツイヒ現今ハルレに住せる予が朋友ビルロト教授との談話に由つてである。此思想は予に於ては、之に近似せる幾多の表象の一群に参加もし、また新たに斯様な表象を喚起もして、茲に此卷に述べたやうな矩合の説となり、而して一種の必然的進行によりて、神の内に於ける靈の一層高尚なる生活の觀念に擴張せられた。然し此思想の創始者は、一般に宗教哲學に於ける如く、不死説に於ても、此書に辿られた方向よりは全然



異つた方向を取り、直に教會の教條に接近するやうになつた。之が爲めに彼は大部分若しくは全然彼が以前抱いて居た此根本思想より離れてしまつた。それで予は彼を此思想の創始者とせなければならぬと信するけれども、今や彼を此思想の代表者と名づくることを敢てしない。此問題に關する此哲學者自身の意見は、近き將來に發行を豫期せらるゝ彼の著述\*に展開せらるゝであらう。

一八三五年八月

ガシュタインに於て誌す

\*ビルロート (Billroth 1808-1836) の此著述は「宗教哲學講義」 Vorlesungen über Religionsphilosophie と稱して千八百三十八年に公にせられた。

## 附錄

フエヒネルの生活及び哲學



フエヒネルの生活及び哲學目次

フエヒネルの生活

前半の生活、科學時期

- 一、幼年學生時代……………一四七
- 二、科學研究、奮闘的生活……………一五八
- 三、病氣……………一七三

後半の生活、哲學時期

- 四、哲學的著述、死後の生活……………一八九
- 五、精神物理學、美學……………一九九
- 六、フエヒネルと降神術……………二一二

目次



目 次

一四六

七、晩年、爲人、習慣……………二一九

フエヒネルの哲學

一、緒論……………二二七

二、生命の起原……………二四〇

三、意識の成立……………二五一

四、不死説……………二六〇

五、結論……………二六八

## フエヒネルの生活及び哲學

### フエヒネルの生活

#### 前半の生活、科學時期

##### 一 幼年、學生時代

フエヒネルは質朴靜肅なる純粹の學者の生涯を送り來たつたものであつて、其外的生活は多く記すべきものはない。然れども、彼は一生を通じて、黽勉熱心なる真理の探求者であり、其中年に至るまでの生活は、崎嶇參差、實に奮闘的であつて、吾

フエヒネルの生活



人をして感憤激勵せしむるものがあり、其後半の生活は、温和質素なる、宗教心に充滿せる哲人の生活であつて、寔に學者の好典型であり、正に傳うるに足るべきものである。

グスタフ・テオドル・フェヒネル (Gustav Theodor Fechner) は千八百〇一年四月十九日、普領當時撒遜に屬した シェレージエン州ニールラウジツのムスコウ (Muskau) 市の近傍、グロースゼー  
ルヘン (Grosssärchen) といへる村に生れた。元來、牧師の家より偉人の出てた例は頗る多い、フェヒネルもその一例である。彼が家は、十八世紀の中頃、既に其祖父の時より牧師をして居た。祖父は此地にて懇到親切なる家父として知られ、又た地主でもあり、醫も兼ねて居た。フェヒネルの父また祖父の業を襲い

て牧師であつた。時恰も十八世紀の所謂啓蒙時代であつて、其時代精神の波は汨として津々浦々までも打寄せ、その風は颯として野の末山の奥にも吹及んだ。フェヒネルの父は、其近隣の地方中、率先して新思潮に浴し、新空氣に觸れた人であつた。彼は此地にて其寺塔に避雷針を備へさせた最初の人であつた。彼はまた眞先に其兒童に種痘さした。また、假髪を被りて説教壇に現はるゝ在來の習慣をも棄てゝしまつた。此假髪着用を止めたことは、大に村人の感情を害したが、彼は救世主基督も假髪を被らずして説教したことを明にし、以て漸く村の役人共を納得させたとのことである。

フェヒネルは此の如く卓越なる父を有して居たが、遺憾に



も永く其膝下に生長することは出来なかつた。彼が父は彼が六歳の時に世を辭した。彼が母は、また牧師の家より出でたものであつたが、是に於て北方數里の小市ツリーベル (Trieber) に移住した。幾くもなくしてフエヒネルは、後ち畫家となつた。彼が兄エツアルムと共に、ライプツィヒの東方數里に在るウルツェン (Wurzen) といふ處に牧師をして居た。彼が叔父の家に世話になることゝなつた。叔父後ち南方チエーリングゲンのラトニス (Kanis) の牧師に移さるゝに及び、二兒共に之に従うて行つた。

フエヒネル十五歳にしてゾーラウ (Zollau) 前田ツリーベルの東數里 のギムナジウムに入學した。幾くもなくして、母居をプレスデンに

移したからして、フエヒネルも母の許に歸り、此地のギムナジウムに入り、やがて其課程を終へた。フエヒネル是に於てプレスデンの醫學校に入り修業したけれども、半歳にして之を退學した。

千八百十七年フエヒネルは歳十七、ライプツィヒ大學に入學し、醫學を修むることゝなつた。萊市は、彼が今ま大學生として此に入つてから、以來七十年、彼が死に至るまで、引續き彼が住所であつた。彼は旅行の爲め只だ折々此を去つたばかりであつた。萊市は實に彼が愛した永住の地となつたのであつた。彼は十七歳の青年、一寒書生として此市に來り、此市にて知識修養を加へて發達し、此市にて有名なる學者となり、此市の名



譽市民に擧げられて此市民に愛慕崇敬せられ、終に此市にて永眠したのであつた。彼は彼が自己の發達と同じく此市の發展を目撃した。彼が最初來た時には、萊市は人口僅に四萬の小規模の都市であつたが、次第に膨脹發達して繁榮隆盛となり、獨逸南北通商の結合點となり、音樂書籍業に於ては、霸權を天下に握れる大市となつた。萊市はフェヒテル遊學の當時、斯の如き未來發達の萌芽を有して居たのであつた。從てライプツィヒ大學も新鮮活潑の英氣が充滿して居た。フェヒテルの俊秀を以て、此敢爲進取の精神に富める地、進銳豪邁の氣象に満てる大學に遊ぶ、其發達は期すべきである。

フェヒネル大學に入學はしたが、學資に乏しかつた、母は充

分に之を供給することが出来なかつた。彼は最初は獎學金の補助を仰ぎ、私宅教授等の如きをして學資の不足を補つて居たが、後には之に代ふるに著述を以てし、重に佛語より理化學に關する翻譯譯述、或は參考書の編纂を爲し、以て學資を調べて居た。

此等著述的事業はフェヒネルが學問の方向を一變するに大に與つて力があつた。即ち此等著述が理化學に關したものであつたからして、彼は自然に醫學より遠ざかつて、理化學に力を竭すやうに至つたのである。且つ當時醫學は、其進歩の狀態猶ほ幼稚であつて、嚴密なる研究の方法も備はつてなく、經驗的事實を説明する學說も乏しく、只だ確實なる困據のなき



傳來の説に由るばかりであり、術としてまた極めて不確實であつて、恰も闇黒の中を手探りするやうであり、學問としては到底科學的の實驗を施しやうがないやうに思はれて居た。斯の如き有様であつたから、醫學はフエヒネルの如き科學的嚴密に傾ける頭腦に満足を與ふることは出来なかつた。且つフエヒネルは其傾向上學理を好んで、實際を喜ばなかつた。從て醫師となつて診療に従事するのは、己の天職でないと感じて居た。故に大學に於ては、純粹の醫學の講義よりは、寧ろ生理學の講義當時生理學は有名なるエーデル教授之を擔當して居たに喜んで出席して居た。彼は實に病理學や治療術の講義には出席せなかつた。彼は書籍にて之を學ぶを以て満足した位であつた。

然しながら、フエヒネルは無事醫科の修業を卒へ、最低の學位ラバチ試験にも及第し、千八百二十二年にはドクトル試験にも及第した。けれども彼は實地の醫者とならなかつた。彼が醫術に就き學修せし所は、却て彼をして此術を嫌はしめ、且つ自己に對して自ら不信用を抱かしむるに與つて効があつた。彼は自分の實地に於ける不堪なるを述べ言て居る。ドクトル試験も及第したからして、正規の手續さへすれば、内科も外科も助産科も行ふことが出来るやうになつたけれども、未だ刺絡したこともない、一つ繃帶を施したこともない、極く樂な出産の手助をしたこともない。此等を稽古する機會があるとも思へないのみか、之を補修するに、元來實地的の能力に



缺如して居ると自ら感じて居た。予は如上の準備なき爲め、實地に當りて困却<sup>こくせつ</sup>るは明瞭である。然し若し予にして、手に衣食の料を得せしめ、且つ他の方向に予を入らしめた著述の業に徐々に従事せなかつたなら、必ず必要に迫られて實地の練習を行ふたに相違ない。フエヒネルの言はゆる他の方向とは、彼が實驗的自然科學に心身を傾注したことである。而して此實驗科學の研究より得たる彼が學問の基礎こそは、彼をして他日學界に非常の貢獻を爲さしめた所のものであるのである。

フエヒネルが實驗科學に入る前に、一時言はゆる思辨的<sup>スペクラーチフ</sup>自然哲學に捕はれたことがあつた。思辨的自然哲學、或は自然的物理學とは、觀察や經驗を顧みずして、單に思惟よりして、自然

宇宙を説明せんとする、當時勢力のあつた哲學說である。是れカントが自然の法則なるものは、吾人が自然を考うる思惟の形式であるといふ思想よりして、一方に偏して發達して來た歴史的學說である。フエヒネルの幼時、オーケン (Oken) なる學者自然哲學教課書といふを著はしたが、フエヒネルは千八百二十年頃之を手にしたといふ。オーケンは實際に自然科學者であつて、比較動物學、解剖學、生理學に關して功勞ある研究を爲した學者である。然し、思辨的哲學、殊にシエーリング哲學の影響を受けて、純粹に思惟より自然の構造を説明した。想像思想に豊富なる青年フエヒネルは、嶄新奇拔な考に充てるオーケンの著述に無量の興味を感じ、一時非常に之に熱心になつ



た。然し科學的嚴密の傾向ある彼が頭腦は、久しく之に魅せられずして、やがて、思辨的哲學が、人の意志、感情、想像に左右せらるゝ架空の説に過ぎざることを看破し、再び實驗的科學に従事するに至つた。

## 二 科學研究奮闘的生活

フエヒネルは千八百廿三年九月ライプツィヒ大學無給講師に擧げられ、翌廿四年ギルベルト教授の死後、物理學の講義を爲し、今や徐々自己の實驗的研究を行ふことが出来るやうになつた。彼はやがて用意周到なる綿密な科學者としての名聲を博するやうになつた。専門家が此認承を彼に與ふるやうになつたことは、彼が他日哲學的考察を爲し、之を科學と結合

せしめ、しかも大膽なる假設を立てし時に、科學者の信用承認を受け、其説の單に空想像の產物にあらざることと思はしめしことに於て、大に好都合であつた。

當時科學の研究年々旺盛となり、物理學中殊に電氣に関する學説發見が續々唱道發表されて居た。千八百二十年は、實に物理學の新時期の始まつた年であつた。同年丁抹人エールステット (Densted) は電磁氣に關する發見を爲し、佛のアムペール (Ampere) は此發見を進めて他の發見を爲した。千八百廿五年英のスタージアン (Sturgeon) 電磁氣を發見し、同年有名なる英のファラデー (Faraday) の研究が始まつて、やがて感應電流を發見した。翌廿六年には獨人オーム (Ohm) かの有名なる



オーム律を發見した。フエヒネルこれらの研究者の群に加はり、凡そ廿年間此方面の研究に従事した。電氣學に關する彼が功勞は、複雑なる場合に於けるオームの測定を完全有効ならしめ、以てオーム律の認識を容易ならしめたものであるといふ。彼が研究に於ける方便材料の不備缺乏を考ふれば、彼が事業は實に驚嘆すべきものであつたことである。彼は彼が著述より得た乏しき費用を節儉して、自分で機械を製し、以て實驗に供したのであつた。而してまた當時精密なる實驗的測定の術は一般物理學者の知らざる所であつて、フエヒネル自身色々之を工夫せなければならなかつた。彼は幾多の困難障礙に遭遇したけれども、その整頓方式の巧妙周密、加ふるに非常

なる勤勉を以て、驚くべき精密の結果を得るに至つた。而して其方便の單純、實に科學實驗の模範であると稱せられて居る。其の他電氣分解に關する重大なる實驗や、ボイネンベルゲル (Bohnberger) の驗電器の改善、電磁石の索引力に關する實驗等其功績尠からずといふ。

此等の研究と同時に、フエヒネルは色彩の主觀的現象に就き討究を企てた。是れ實に彼が純物理的純客觀的研究より生理的、心理的研究の過程に當り、彼が後に創始した前人未發の精神物理學の前驅とも見るべきである。主觀的色彩現象とは今日心理學にて言ふ補色、殘像、對比等の如き現象であつて、誰人も能く經驗する最も著しき例は、太陽を見た後ち暫時は、何



を見ても色づいて見えないことなき主觀的現象である。フェヒネルは此等主觀的現象の研究を始め、其遂げた所は此等の現象の一部分であつたけれども、組織的觀察に對する新領域を發見し、之より結果を擧げたことや、一現象をも極めて熱心に研究し、如何なる勞力をも避けず、遂には健康をも損するに至つた位であつたこと等は、能くフェヒネルの特性が是に發揮されて居る。

以上列記の研究は、フェヒネルをして諸種の新發見をなさしめ、卓越なる物理學者として名聲を博するに至らしめたのであるが、しかし之は單に彼が時間と勞力とを費した彼が一小部分の事業である。彼は彼が衣食の爲め非常なる仕事をせ

なければならなかつた。而して其仕事は前に述べた如く著述であつた。彼は實に奮闘的生活を戦ひつゝあつた。彼が衣食の爲めの事業を一瞥せば、誰人も彼が勤勉、彼が精力の絶大を驚嘆せざるを得ない。彼は千八百廿四年より同卅年に至るまでに、上述の研究及び腦病に關する翻譯の外、六卷より成るティナルド (Thenard) 佛蘭西の有名なる化學者 の化學書の譯述、四卷より成るピイオ (Pio) 佛の物理學者 の物理學、全く改削を加へた同書五卷、凡て重要な新研究新發見の報告をも含める化學の參考書二卷、また千八百卅二年までに實驗物理學の同様なる參考書三卷、物理化學に關する小論文の外に、上述の電氣學に關する二種の比較的長き論文、千八百三十年以來、藥劑に關する雜誌の編輯、



教科用の爲めに編纂した生理學の書及び論理學の書、またドクトル・ミーゼスの假名の下に著せる幾多の諷刺的論文等、皆彼が數年間の事業である。

以上の著述は低く見積つても、一年に三卷乃至四卷出した譯である。此等は單に翻譯としても非常な事業である。然るにフエヒネルの如き人は、單に翻譯者を以て満足せない。原書に不足不滿の處があれば、彼は自ら自己の作を之に加へ、或は之に改善を加へ、完備を計り、終には原著と全く異なりたるものとなした。故にテイナルドの化學の第三卷の序文に、有機化學に於ては、佛書は只だ之を利用したのみであつて、重なる處は自己の作であると譯つてある。故にテイナルドの六卷の中、後

の四卷は、全くフエヒネル自身の作である。ビイオの物理學に於ても同様である。例へば光學に關してビイオは、ニウトンの放射説を守つて居たが、フエヒネルはハ・ゲンの波動説に加擔して居た。ところが丁度フレネルの實驗に依つて波動説が勝利を得たからして、フエヒネルは原書を改めた。其他の點に於ても同様に新研究に従つて之を改善し、しかも電氣學に關する一卷を之に加へて五卷となした。故に此等の譯述は實際に於て、其正味譯述者フエヒネルの精神的財産であるのである。只だ書肆がまだ名もよく顯はれぬ獨逸の無給講師の名を以てするよりは、原著者なる佛蘭西の大家の名を以て出した方が、商賣上有利であつたからして、斯くフエヒネルの著述と



せなかつたのである。此等の譯述と密接の關係ある参考書も、同様に驚くべき精力の證據物であり、同時に一個人に稀なる多方面を以て、嚴密科學の諸方面の材料を自由に使回したことを證明して居る。彼は之に於て、雜誌や報告に現はれたる實驗的研究に關して忠實なる一覽を供給したのみならず、純粹に理論的數學物理的研究の困難なる問題に於ても、假説や結論を明瞭に説明して、能く人をして之を悟了せしむる技倆は、實に驚くべきものである。また當時發表せられた諸種の學者の説も明瞭に紹介せられて、今日と雖も之を讀んで益する所尠からずといふ。是等は固より純粹に自己の創始にあらずして、再生的のものであるけれども、如何にフエヒネルが科學

研究の結果を會得し、之を評價することが出来たかを表はし、以て彼自身も創始的能力を有して居たことを現はして居る。ダントは言つて居る、若し此等の事業が往々非常に困難なる外的境遇の下に、實際フエヒネル一人にて爲されたものであるといふことを知らない人は、必ず一人の名の下に學者の一群が働いたと思ふであらうと。

フエヒネル自ら好んで此等の重荷を擔うた譯でない。彼は出来得るならば、彼が時間と勞力とを獨立の研究に費やしたのであつた。然れども收入無き講師の身であり、實地の醫師には前に述べた通りなる事を欲せなかつた。而して彼は千八百卅年ライプツィヒの參議官の女、クララ・ラフォルクマンと



婚を約したが、同卅三年には遂に婚を結ぶことゝなつた。彼は愈々筆を繁忙に働かせなければならなかつた。只だ彼は彼が精力を信じて居つたのであつた。また有名なる書籍商の市のことゝて著述の依頼は絶えずあつた。否な彼には餘計なほどあつた。彼は學者が純粹に科學的の著述をのみ爲しても、當時の萊市に於ては筆の力を以て、質朴の生活なら、親子三人を維持するに充分であることを證明した。

フエヒネルは上述の教課書や参考書の著述終るや、未來に對して確實なる収入を得んが爲め、本屋の依頼を受け、家庭辭書の編輯を引受けた。是れ全部八卷より成り、千八百卅四年より同卅八年までに出版された。其中諸種の問題を含んで居る

約三分の一は、フエヒネル自身の手で成つた。然るにフエヒネルが非常の勞力と時間を懸けた。此著述は、諸種の事情の爲め不幸失敗に終つた。彼は其最初期した収入を得ることが出来なかつた。彼は中途にして此の失敗に歸すべきを曉つたけれども、一旦約した事業は遂に之を貫徹した。以て彼が人物を見るべきである。

千八百卅四年夏、ゴッベル教授ゲッテンゲン大學に轉任となつたからして、其の後任としてフエヒネルは物理學の正教授に推舉せられた。フエヒネルは家庭辭書を引受けた義務があるからとて、一旦は此推薦を辭退した。ところが朋友共が其朋友の中には辭書の出版人なるドクトル・ヘルテルもあつた



熱心に勤めたに由つて遂に就職することゝなつた。彼は是に於て衣食の心配は無くなつたけれども、時既に遅く、彼が是まで爲した非常なる勉強の結果、彼が精力はやがて消耗し、後には非常なる大病に罹つた。

此大病は彼が精神生活に大なる變動を及ぼし、其研究に新方向を與へ、彼が生涯を二分劃した重大事件であるから、之を詳細に述べやうと思ふ。然し之に先ち、フェヒネルが多方面を現はすに足る滑稽的諷刺的著述のことを、少しく記することを略してはならぬ。

此等の著述は、上述の事業の傍ら其餘暇を以て作つたのであつて、フェヒネルが精力の餘裕を示すのみならず、實に彼が

豊富なる想像、批評的才能の發露なることを現はして居る。此等は多くは當時の醫學及び自然哲學に諷刺を加へたものである。其中月の沃度より成る證明は、千八百二十一年公當時醫者が極めて廣く沃度を使用したことを譏つたものである。現今の醫學博物學に對する讚辭千八百二十二年公は治療法の數應用等に關する醫學の進歩を諷刺的に讚したものであつて、如何なる治療も如何なる病でも治し、如何なる病氣も如何なる治療にても治せらるゝと言ふが、全篇の主旨を能く現はして居る。

此等の著述は皆ドクトル・ミーズスなる假名にて發表せられたものである。フェヒネルは眞面目なる科學的の著述は、皆本名にて公にしたけれども、想像的のもの詩的のものには、皆



な此假名を用ゐた。而して此假名の下に現はれた著述は、上記の二書の外猶ほ數種あるけれども、煩はしいから之を記せない。然し其中には、半ば眞面目であるのもある。「死後の生活」の如きも、最初は此假名の下に發刊せられたけれども、二版には本名を以て出だしたのは、其中の思想が實際に彼が眞面目のものになつたからである。

フェヒテルは詩趣に富み、頗る詩人リウツケルトを喜び、また自ら作詩をした。其病中に成りし抒情詩の小冊子千八百四十一年ミトゼスの名にて出た。フェヒテルはまた彼が性來の嗜好に加ふるに、彼が境遇上美術に親む機會が多く、従て美術の鑑識に富み、千八百卅九年ライプツイヒに催うせられたる

展覽會の繪畫に對する論文は、彼が他日の大美學者たるを證明して居る。

次にフェヒテルが大病のことを述べやう。

### 三 病氣

前に述べた通りフェヒテルは是迄非常な勉強をした。科學の研究の外に、家庭辭書の編輯なる大事業を引受け、爲めに過度に身心を使役した。千八百三十四年には物理學の正教授となつた。此時既に精神の疲勞は現はれて來た。彼は漸く大學の講義の職務を果たすことを得た。精力は次第に消耗して來る。千八百三十五年及び同卅九年兩回保養の爲め旅行をしたけれども、只だ一時快を覺わただけであつた。彼は益々精力衰へ、



六ヶしき講義は困難となり、通俗的講義を爲すやうになつた。状態は益々悪く、やがて不眠症に陥つた。然れども研究心は依然として強大であるからして、閑居無爲を許さない。彼は理論的研究の如く心を勞することがないからとて、實驗的研究に従事して居た。主觀的色彩の研究の加きが是れである。

然れども此等の比較的勞力を要せない觀察も今は有害であつた。神経系統の疲勞して居るところに、割合に多く眼を使用したから直に之を損じた。今や視覚は日光を避けなければならなかつた。無論読み書きすることも出来ない。室中に閉込んで居なければならぬ。色眼鏡の使用ではいけない、絶えず眼を繙帯して居らなければならぬ。やがて全く盲目になら

んどの危険に瀕した。是れ實に千八百四十年より始まり、同四十三年の秋に至つて快方に向ひ、其年の暮には急に恢復するやうになつた。

眼病に罹つてから程なく神経衰弱の苦痛が始まり、後には消化機能の故障が起り、生命覺束なしと見わた。フエヒナルが後に此状態を記したものは、之にて能く彼が病狀が分るのみならず、またよく彼が習慣感情思想等を現はすから、次に抄譯することゝする。

「平生精神的作業に従事し、手に筆と本を以て働く外、他人との交際、社交的娛樂、其他何事にも慣れないからして、直に非常な怠屈に苦んだ。他人より本を讀んで貰つても不満足であつ



た。一體單に慰の爲めに讀書するといふことは嫌いであつたし、以前より他人の著述を読むのは、之が自分の作り出す思想と關係があるから興味があるのであつた。然し自分の思想を作り出すことは、予が性分として、手に筆を持つて居らなければ出來ない。予は思想を筆して初て自由に之を考ふることが出來るのである。他の人より讀んで貰へば、此處彼處比較することも出來なければ、撰擇することも出來ない。他人なら斯様な境遇に在つてもつと樂であつたかも知れぬ。予は現に斯様な例を見たことがある。しかし予が性分は致方がなかつた。書取らせるのも自分には非常に困難であつた。予は予が窮屈な特別な著述法を有して居た。フエヒネルは自ら草稿を書し後ち今幾度も之を改める習慣であつた

は病氣の爲め之を行ふことが出來なかつたから、全く仕やうがなかつた。且つ頭腦は推理の力を損せなかつたから、物を考ふることは出來るが、之を書付けないからして、心ばかりでは、之を検べ且つ之を進めることは出來なかつた。偶々心中で之をやつて見ると、直に之を書付けないのだからして、後に之を書取らせんが爲め、其全體部分を記憶にありくと支持して置かなければならぬ。そうすると努力が必要である。ところが此努力は無爲にして居るより有害であつた。頭の矩合は益々悪くなつた。予は予が羞明フエヒネルの罹つた光を堪へない眼病の名の差支なき限り、曇天に散歩し、後には夕景、或は白晝目に縋帶をして散歩をし、以て最初の一年は重に抒情詩を作つて慰んで居た。予が詩集



の大部分はかくして出来たものであつた。後ち美的或は哲學的問題に就き、予が妻に少しく書取らせなければ、一向満足のものも出来なかつた。以て學者としてのフエヒネルが習慣努力及び彼が境遇の困難を見る事が出来る。

上記の困難は彼が重患の最初の時期の状態である。眼病に對しては色々醫者の施術を加へたけれども、其効がなかつた。最後に施した一施術は、フエヒネルが身を半ば棺桶の中に入れた。千八百四十一年十二月化膿させんが爲め、三日間背に灸を施した。弱りきつて居る體に此の如き亂暴なる處置は、全く消化機能を損じ、飲食共に喉を通らなくなつた。フエヒネルは數週間全く飲食を絶した。醫師共は斯くしても猶ほ生きて居

ることの出来るものであるかと思つて居た。フエヒネルは全く皮と骨とばかりになり、衰弱して臥し、正に餓死に迫り、人々も駄目と思つた。然しフエヒネルは「自分の精神は全く活潑自由であつた」と自ら言つて居る。

やがて果物を少々食べるやうになつた。然し固より元氣づくに至らなかつた。丁度其時フエヒネルの家と少しく知合の一婦人、或る食物を用意し來り、此食物をフエヒネルの爲めに作つた夢を見たと言つた。フエヒネル怪んで食つて見たが、口に適した。此時分より彼が消化力また元氣が徐々に恢復し始め、死を免れた。到底助からぬと思つて居たのに、此意外の、しかも不思議のことよりして起つた救助は、フエヒネルに深き印



象を興へた。

一八〇

然し彼の病氣は容易に治らない。眼病は依然として悪く、今度は頭が非常に悪くなつて來た。フェヒネルは自ら述べて書て居る。千八百四十二年十一月予が頭の弱りかたは極度に達して、一日中のことを回顧することさへ不可能になつたからして、日記の記入も止めなければならなかつたのみならず、他人より讀んで貰ふことも、話を聞かして貰ふことも堪へられなくなつた。しかも談話を聴くことも出来なければ、自ら談話をすることも出来なくなつた。之をすると直に頭に惱なやみを感じ、るから警戒を加へた。また自分獨りで樂むことも出来ない。何でも過去のことを考ふること、自分で努めて思想を辿ること

などすると、すぐまた苦惱の感が起つて、精神の力は全然頽敗に歸してしまふかと思つた。かやうな都合であるから、他人に接することも出来ず、全く人と隔離せざるを得なかつた。他人と話すこともわるいから知人を近づけてはならなかつた。妻との談話も已むを得ぬことにのみ限られ、有らゆる樂といふものは禁せられたから、非常な怠屈が襲うて來て、殆んど之を堪ふことが出来なかつた。然し精神の能力は、かく弱つて居るけれども、其明亮は依然として以前の通りであり、且つ仕事を爲すの能力は全く破壊されて居るのに、之を爲したい欲求は依然として従前の如くであつた。

「予が境遇を困難ならしむるに他の事情が手傳つた。予が羞



明は夏の間薄暗な光は堪へらるゝやうになつて居たが、また悪くなり、闇室に閉込んで居なければならなかつた、而して時々、眼が痛み、又た齒が痛み、夜はよく休まれず、しかも最近十年間絶えず自分を惱ました頭痛は、屢々襲到つた。消化力は益々悪くなつて、少しも食事が出来ず、また未來糊口の心配も之に加はつた。予が職は既に他人に任命されており、まだ決定しては居らなかつたが、恩給金は最も質朴な生活にも足ると思へなかつた。

フェヒネルは其腦病の特徴を以て、思想の進行を意志を以て左右することが出来ざるに在りとし、思想が一事物に、しかも時につまらぬ事に附纏ひて、いくら心を他に轉じやうと思

つて力めて見るけれども、どうしても考が之から離れなかつたと言て居る。多分今日精神病學者が言ふ強迫觀念であつたらう。彼は幾度も死を冀つたけれども、自殺の罪を犯すよりは、寧ろ來世に於て現世にて避けられなかつた苦惱を補ふと確信して居た。彼は其他色々な事を思つた。彼は今ま踊の状態であつて、やがて再び若返り、新しき活力を以て此状態より出づるであらうと思つた。或は精神活力の全然頹敗に歸して居るを思つては、かやうな希望は無益であるとも思つた。或は此苦しき状態が永續せんことをも恐れた。

彼は依然として暗室に住し、其最愛の妻よりも分れて居らなければならなかつた。半ばは斯様な暗室に妻を留むること



の氣毒さと、半ばは談話が有害で之を避けなければならなかつたからである。彼は食卓に出づる時には、光線を避くる爲め、絹帯はむさ苦しいからとて、假面を被つて、沈黙して坐し、用事は言語よりは身振で済ました。

此病氣は二周年を越わても依然として快方に向はない、やがて三周年にならんとして居る。フェヒネルは千八百四十三年八月が最も難澁な月であつたと言つて居る、彼は日々絶望と闘つた。彼は宗教心を以て之と闘つた。自ら唱へた、或は隣室にて唱へた宗教的の歌は、時々慰藉を彼に與へたことがあつた。彼が忍耐、彼が諦め方、充分の嘆稱に値する。同年秋に入つて、恢復の曙光が見わた、十月初旬急に腦も眼も共に快方に向う

た。彼は試に光線に對して目を開いて見た、數回試みて見たが、暫時ではあつたが、白日に眼を使用することが出來た。勿論一度以前の惡さに戻つたことがあつたけれども、頭も眼も規則正しく使用を試みて、遂には良くなるやうになつた。同時に食欲も比較的早く良好に向ひ、一般に身體がよくなつて來た。十一月の上半には、日光に散歩することが出来るやうになり、朋友へ短時の訪問も出來、夜は遮光蓋を施さずして、ランプの光に浴して坐ることが出来るやうになつた。精神の力も、勉強力も恢復し來て、書齋に坐るやうになつた。千八百四十三年の暮には、是まで盲目と思はれ、精神の全く頽敗したと思はれ、救助の見込なしと思はれた者が、全く快癒してしまつた。當時醫師



も不思議と思つて居たが、是れ疑もなく今日所謂自己暗示の作用であつたに相違ないと、ヴントが言つて居る。

フェヒネルは此意外の快癒よりして、甚深の感動を受け、言て曰く、「予は神が予に重大な事業を託し、此苦惱により、此事業に予を準備せしめたのであつたと信じた。予は既に身心に非常な力を有して居ると想像し、全世界を以前及び現今より異なりたる矩合に見るに至るべきを思つた。世界の謎は自ら解けるやうに思はれ、以前の存在は消失して、此轉變が新誕生である如く思つた。實に此病氣の快治はフェヒネルが生活を二分し、彼が思想生活に新時期を作つた。彼は自然科学者より一轉して哲學者となり、預言者の宗教的思想家となつた。神、宇宙

現世、來世等に關する彼が従前の斷片的の考は、連絡ある圓滿なる系統に組織せられた。フェヒネルは晩年、其生涯を顧みて言つて居る。曰く、「予は坦々たる人生の夷路を來たものではない。然れども生涯を一瞥回顧せば、予は非帶な災禍の爲め、此以上の災禍に罹らずに濟んだ。又た其結果として却て幸福が生じた。予は予が心に誓ひし所を凡て果たしたらんには、予は一層重大なることに於て貧弱であつたであらう。是れ彼は此大病に罹らずば、其期したる自然科学の研究の成功は、一層大であつたらうけれども、宗教的哲學的思想、之に關連する研究に於て貧弱であつたらうとの意であらう。實に大患の彼を惱ますことがなかつたら、物理上の研究は進行したらうけれど



も、彼の世界観彼の哲學を失ひ、又た精神物理學をも失ひ、彼が後の學界に貢献し所を失ひ、一言せば、フエヒネルのフエヒネルたる所以を失つたであらう。

## 後半の生活、哲學時期

### 四 哲學的著述「死後の生活」

フエヒネルが病中、大學の講義は、彼が先任者の子ブランドスに依つて代理せられた。彼が病氣の恢復の希望は全く放棄されて居たからして、物理學の講座は、當時職を有せなかつた并ルヘルム・エーベルに任命せられた。フエヒネルは保養料年額八百五十ターレルを受け、後ち兩回二百ターレル宛増加せ



られた。フェヒネル病癒ゆるや、エーベル再びゲツチンゲンに歸つたからして、物理學の講座は空位となつた。然れどもフェヒネルは以前の職に就かんことを要求せなかつた。是れ多くの講義を爲すことが骨折れでもあり、且つ今や物理學に對して多く興味を有せなくなつたからである。然れども業務なくして支給のみ受くるは、フェヒネルの欲せざる所であつたからして、千八百四十六年の夏より、彼が新に思想を向けた研究の方面に對して講義を始めた。最初は「最高善」なる標題にて哲學的倫理的問題を論じ、後ち自然哲學、結局の事物、人類學、靈魂の座、身心の關係、精神物理學、美學等の諸問題に關して講義を與へた。以て彼が研究の方向を察することが出来る。

フェヒネルがかの大病以後に大に發達した哲學的傾向は、固より既に其以前より彼にあつたのである。彼は前に折々哲學的思辨に耽つたことがあつた。千八百廿五年ドクトル・ミーゼスの名の下に現はれたる「天使の比較解剖」の如きも、此傾向の發露と見るべきである。「死後の生活」は此後十年、千八百卅六年同じくミーゼスの名にて現はれた。該著の稿成りしは、前年八月ガスタインなる處なることが第一版の跋文に記してある。ガスタインは南嶼の山地に在つて、千八百卅五年フェヒネルが病氣の初期、保養の爲め旅行した處である。該著は乃ち此幽邃なる山地に保養中作つたものなることが分る。此著全體が如何にも詩的であつて、技巧の點より見ば、彼が著述中の一番



完全なるものであると、ザントも言つて居る。此著述の根本思想は、大なる普遍的意識があつて、人間の個人的意識も、次第により大なる他の意識の層の媒介を経て、遂には此普遍的大意識に根原基礎を有して居るといふのである。而して是よりして人間の不死を説いたものである。此思想は、彼が後ち益々確信したところであつて、實に彼が哲學の中心思想、寧ろ彼が哲學の結論とも言ふべきである。「死後の生活」の思想は、後ち彼が哲學上の思想を網羅せる大著ツェンドアフェスタの中に布演せられてある。「死後の生活」は最初はミイゼスの名にて出されたが、是れ彼が其時未だ之を彼が正統嚴肅の考とせなかつたからである。然れども後には彼が眞面目の思想となつて、第

二版は彼が本名にて發行せられ、其序文に此旨が暗示されてある。故に「死後の生活」は、かの大病の前の作であるけれども、其性質上大病後の著述の群に入れて見るべきものであり、且つ彼が哲學上の著述の先驅とも謂ふべきものである。

フェヒネルが哲學上の次の作は、千八百四十八年に出版されて「ナンナ、一名、植物精神生活」(Nanna oder über das Seelenleben der Pflanzen) である。ナンナはノルス人の崇める光の神、春の神なるバルヅルの妻であつて、花の女神である。此著の根本の思想矢張「死後の生活」のそれと同一であつて、宇宙には意識の階段があり、最後に普遍的大精神がありて萬物を包有すといふ考よりして、植物も精神があると論じた美しき著述である。



千八百五十一年フエヒネルが哲學上の大著述「ツエンド  
 アフェスタ一名天と來世の事物」(Zend-Avesta oder die Dinge des  
 Himmels und des Jenseits) が公にせられた。ツエンドアフェス  
 タは元と波斯の聖者ツオロアステル或はゾロアス  
 ターともいふの教義を載  
 せたる經典の名であつて「活語」の義である。フエヒネルは之を  
 假り、以て自然宇宙を活かす言葉の義に用ゐたのであらう。  
 ツエンドアフェスタにはフエヒネルが全哲學全思想が網  
 羅されてある。彼が後の著述の内容は、少なくとも胚種の形に  
 て此書に包含されてある。否、寧ろ其後の著述はツエンドア  
 フェスタの説の解釋、經驗的事實法則を集めて此説の固めと  
 なし、此説に確乎不動の基礎を與へんと企てたものと見るべ

きである。彼が精神物理学の結局の目的内容も、疑もなくツエ  
 ンドアフェスタと同一であると、ザントは主張して居る。

ナンナ及びツエンドアフェスタの現はれた時は、丁度時勢、  
 時代の精神が、此書を歓迎し、フエヒネルの考を了解するに頗  
 る都合が悪るかつた。獨逸國民は其自力を自覺し、其發展隆盛  
 を計るに熱中し始めて來て、言はゞ國民に魂があると感じ初  
 めた時であつて、ナンナ中に説ける小植物に魂があるなどに  
 心を傾ける餘裕はなかつた。偶々之に注意するものがあつて  
 も、魂あり靈ある花を折つたとて心を痛める情脆き婦人、さら  
 ずは、フエヒネルも分の分らぬことをいふ男だと頭を振る科  
 學者であつた。而してまた當時ヘーゲル哲學、一般に思辨哲學



既に衰へ、世は科學的、經驗的、唯物論的傾向の時代となつた。フエヒネル自身は是迄思辨哲學に反對して、經驗科學の爲めに戦つた。又は是からも絶えず熱心に之と闘つた。然るにツェンドアフェスタは既に其標題が「天と來世の事物」とあつて經驗の範圍、科學研究の對象を超越して居る。實にフエヒネルは此書に於て經驗に止らずして、之を超越して形而上學に移り、自然を以て神、或は精神的統一となすに至つた。自然科學者は之を喜ばない。彼等は宇宙を以て機械的仕懸となさんとして居る。然し是に於て彼等自身も既に經驗を越へたる形而上學に移つたことを覺らない。彼等は只だフエヒネルが宇宙を以て靈となし神となすのが氣に入らない。科學者多くはフエヒネ

ルを以て妄想家となして、彼の自然研究を信用せない。また哲學者は元からフエヒネルが敵であつたから、彼の著述を顧ない。斯様なのが當時の状態であつた。フエヒネルの著述は一向重んぜられなかつた。後ち時代の傾向が哲學にも興味を有つやうになり、カントに歸れの聲が出づると共に、唯物論の一方に偏して居ることも知られ、フエヒネルが精神物理學なる新科學を創始して、科學者の信用を恢復するやうになつて、彼の著述は驚嘆を以て讀まるゝやうになつた。

フエヒネルは彼が著述に對する世間の冷淡の爲に決して落膽せない。彼は彼が説を深く信じて居た。彼は彼が確信、彼が依て以て安身立命福祉を得た確信を、如何にしても世に廣め